

イナイレに転生したから
伝説になろう！

人 狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然死んでしまった 石田 悠（いしだ ゆう）は神様と会い転生でイナズマイレブンを選ぶのだが、しかし…

※この作品は処女作です。 キャラ崩壊原作崩壊があるかもしれません
アンチ・ヘイト多々ありの可能性ががあります

最初は1話から見た方がオススメです。最新話からみると分からなくなります。

ストーリーは原作前↓FF編↓エイリア学園↓世界編↓クロノストーン編↓ギヤラクシー編の予定です途中オリジナルストーリーや話の改変を入る可能性があります。

天馬時代のホーリーロードはタイムジャンプに必要なものが無いため無理です。す

みません。

現在モチベがなく停止中理由は活動報告を見てくれると助かります

目次

F F編

第1話 神様との話 プロローグ

1

原作前の話

第2話 やつぱり神様優秀すぎない？

5

第3話 お日さま園に別れを

第4話 ○○との出会い

第5話 雷門中サッカー部始動!!そして

未来からの来訪者!

第6話 プロトコル・オメガとの戦い

30

第7話 サッカーやろうぜ!

第8話 メンバー大募集!

第9話 帝国との練習試合、そして新

たなる技!

祝! 第10話 蒼きドラゴンの誕生!

第11話 尾刈斗中の呪い

第12話 新たなる部員!そしてを生

み出せ!

第13話 弱虫な巨人の成長

第14話 モノマネ大好きな奴が来る

!

123

51

59

新

76

88

98

105

115

123

第15話 学校の開かずの間 そし

て御影専農との戦い 130

第16話 趣味に没頭するっていいよ

ね… 140

第17話 目金立つ！ 148

第18話 帝国のスパイ！ 156

第19話 監督スカウト 165

第20話 兄妹の絆！ 171

第21話 決戦！帝国学園！ 182

第22話 伝説！イナズマイレブン！

と謎の人物 196

第23話 風丸部活辞めるかもってよ

第1話神様との話 プロローグ

オッス！オラ孫悟空！　じゃなかつた石田　悠《いしだ　ゆう》！え？最初から飛ばしすぎ？なんのことやら？そんなことより今俺はこの世界の神様だと言つてる奴がいる　え？何言つてるのかわからねー？　大丈夫だ俺もだ！

神様「ちよつとー　なにー　シカトしないでよー　あ！もしかして信用してない？してないんでしょ！」

悠「当たり前でしょ！　いきなりここに来て　私は神だ　とかどこのお笑い芸人だよ！　最終的に暇を持て余した神々の遊びとかがオチでしょ！信じて欲しかったら証拠出してよ！」

神様「えーしようがないなー　んーとねー君の名前は、石田　悠くんで歳は17歳で千葉県生まれで　高校三年生！　部活はサッカーをやつていて好きなせいでわかつた！わかつた！からこれ以上いわないで！」　ふふーん　わかればいいんだよ！わかればいいわ！」

あぶねーこの人まじであぶねー　軽く人の好きなのペラペラ喋りすぎでしょ　恐ろしいわ！　てかなんでここにいいのか聞かないと

悠「えーと 神様? ここはどこなの?」

神様「うん? ここ? ここはねー死の世界だよ! 簡単に言うとな現世で君は亡くなっ
たんだよ」

悠「それって ま?」

神様「ま」

わーお神様現代の言葉しつてるとかシャレオツー(棒読み)ん? までよ? てことは?
あれか? もしかしてあれかな!」

悠「神様これもしかして転生のパターン?」

神様「そだよー! みんな大好き転生だよー」

あーやっぱりかーうんうんそうだよねー 普通だつたら三途の川だよそして閻魔様
だよじーくーじーくーすーてーきーなーじーくー

やべ思い出して歌つちやつた テヘペロ。 :。 *。 .

神様「で どこに転s 「イナイレ」はやくないか? まあいいけど? で? どっち? 無印
? GO?」

やっぱり聞くかーそれうん これは究極の選択だよー円堂にすると世界に挑戦とか
エイリアン学園とかあるけど天馬だとタイムスリップとか宇宙とかもいけるしーうー
んー

神様「迷ってるなら色々都合よくするけどどう？」

悠「まじかよ トツツアンそれじゃあ無印時代で生まれてほしいであと他にもいろいろ入りたいんだけどできる？」

神様「私にー任せてクダサーイ!!」

悠「え なにそのバーニングラブとか言ってきたきそうな感じの言い方」

神様「いやー楽しいよね艦これとくに金剛が推しかなー」

まじか 神様艦これしてるよ、驚きだよこれ声優の人好きだったらその他の作品も見てるパターンだよ。

神様「声優の人もいいよねーおかげでほかの作品も見ちゃった。」

まじであたったよー!ん?まてよ?てことは?もしかして?もうひとつお願いできるか?これ?

悠「神様 もしかして俺ガイル見た？」

神様「モチのロン」

悠「まじか もうひとつお願いなんだけどー」

神様「あくなんとなく分かった 飲み物でしょ? そつちに用意するから楽しみにして。それとあつちの世界に通用するようにしとくから」

やだ…この神様優秀すぎない…?

神様「もう やることないよね？ じゃあいくよー」

悠「う うん！ じゃあ 行ってくるよ！」

神様「行つてらっしやゝいゝ」

こうして俺はイナズマイレブンの世界に飛ぶことになった…

てかこれ原作崩壊とかしたらまずいよね？ やらかさないようにしよ…

原作前の話

第2話やっぱり神様優秀すぎない？

無事にイナズマイレブンの世界に転生したのはいいよしたのはだけだよー神様さすがに

悠「優秀すぎでドン引きレベルだよこれ…」

瞳子「何言ってるの？悠？」

悠「気にしないで姉さん」

いやーこれ本当にドン引きだよ…なんせ産まれて何ヶ月でお日さま園に直行だぜ？
おいおい冗談はやめてくれよ…まあ せっかく転生したんだから面白いことしようとか
神様思ってたんだろこれ まあ実際そうだけどねーアハハ！

今の俺の歳は6歳だ。そう6歳だぞ！ 決してその前の話は？とか言うなよ！主の
思考回路は焼けるぞ！てか主ってだれだよ… その前に1番怖かったのは姉さんだつ
たわ。

瞳子「私の名前は瞳子よ。気軽に姉ちゃんと呼んでね。」

悠「瞳子さん」

瞳子「お姉ちゃんだよ？」

悠「瞳k「お姉ちゃんだよ悠くん？」お お姉ちゃん…」

瞳子「よく出来ました(ニコツ)」

やべーよ… この人やべーよ…笑顔で脅してるよ…初めてだよ笑顔で脅されたのいやーてつきりアニメとかの話だと思ってたわウンウン

これが転生してから今のところ1番のトラウマねあの笑顔はまじでヤバタニエン…それはそうと俺の名前は悠のままだった。多分神様のことだから前世と同じ名前の

石田 悠にするだろうと予想した。

しかし1番いいことは…

???「悠くんく遊ぼうく」

悠「いいよータツヤーなにして遊ぶ？」

タツヤ「サツカーしよう！」

そうお日さま園と言ったら、後にエイリア学園になる子供たちがいるところで、タツヤも後にヒロトになる子供だ。

てかかわいいわーお日さま園のみんな。なんであんな宇宙人になっちゃうんだろ…お兄ちゃんは悲しいです…。え？お兄ちゃんじゃない？ばつかそりや前世を考えると俺なんて17だぞ？え？犯罪者予備軍？やめて本当にやめて！

悠「サッカーをするのはいいけどチームはどうするの？また俺が助っ人に入るの？」

タツヤ「今日は僕達土星g」「ちよつとまったー!!」「あーあ来ちゃった。」

晴矢「今日は俺たち太陽組だぞ！」

風介「いや私たち水星組だ。」

治「なにを言っている！俺たちの冥王組だ！」

リュウジ「なに言ってるのさ！今日は僕たちの双子座組だよ！」

タツヤ「ちがうよ？僕たち土星組だよ？」

悠「ほらーいつもの始まるよー」

そうこれはもうお約束になってるのだ。いつもエイリア学園の各チームのキャプテン達が悠はこつちだよ！やいやこつちだと毎回言い合いになり、ほかの子達もそれに参加して言い合いになる。正直困ったもんだ。時々、姉さんに助けてもらってるが、あまり意味が無い。さーていつものやりですか…

悠「おーい みんな！」

みんな「なに??」「なに??」

悠「1対1で俺に抜かれずにボールを取った人のチームに入るのはどう？」

みんな「いいよ!!」「いいよ!!」

そう毎回言い合いになってるので、1対1をして俺に抜かれずにボールを取った人が

いるチームに入る。毎回本気でやり飽きてきたらなんとなく負ける。そうしないと無限ループになるからだ。無限ループって怖いもんね！

悠「さーて誰から来るの？」

???「私が行く…」

悠「あれ？珍しいね？クララが最初なんて？」

彼女はクララ。唯一、本名とエイリア学園での名前が変わってない子だ。てかなんでクララだけ名前変わってないんだ？手抜きか？手抜きなのか？これ以上言うのはやめとこう結構人気なんだよねクララって。カオスにも入ってるし何故かキーパーにも使えるし…なんでだろ？

クララ「いくよ…」

悠「こい！」

クララが俺の前に立ち抜かされないようにしてるが、フェイントを入れたら

クララ「いま！」

悠「甘いよ」

そして俺は彼女を躲し抜き去った。そうクララはフェイントに弱いのだ。

悠「抜かされないようにするのはいいけど、フェイントに引っかけりすぎだよ？」

クララ「…（シヨボーン）」

あつやべ落ち込ませたかな？しょうがないなー

悠「まあ 頑張れば成長するさ（ヨシヨシ）」

クララ「うん…」

これぞ！必殺！ヨシヨシだ！だいたいこれをすればみんな機嫌が良くなる！いやこれするとみんなチヨロインみたいな感じになるのは気のせいだと思うね！うん、そう思う！と心の中で思ってたら

??? 「次は私ね！」

悠「またか杏…」

杏「またって何よ！今日こそ勝つんだから！」

こいつは杏。後にプロミネンスのレアンになる子だ。自分より強いやつは許さないと言うなんというか…うん…強く生きろよ…

杏「いくよ！」

杏はそう言うや否やすぐにスライディングを仕掛けてきた。やっぱりいつものパターンか…

悠「いつも同じことしかないね！本当に！」

そう言いながら俺はジャンプして躲した。

杏「なんで避けるのよ！」

悠「いや 避けるだろ！普通に考えろ！いつも同じことやったって意味無いよ！」

杏「次こそは勝つからね！」

悠「あーはいはい」

杏「適當すぎ！」

杏は本当にいつもワンパターンのスライディングをしてくるのだ。正直スライディングして怪我するなよと思っていたが、それは超次元のおかげでキズがない。うん超次元でいいね！本当に！

そうして、いろんなやつ勝ち続け次に来たのだから？（ポケモン風）

??? 「次は私ね」

悠「次は愛かーこい！」

愛「ハア！」

彼女は愛。後のダイヤモンドダストのチームに属するアイシーだ。彼女には兄があり、兄の名前は修児でアイキューと名乗る男だ。その兄には問題がある。

修児「（ジー）」

うわーやりにく！どんだけシスコンなんだよ！

そう修児はシスコンなのだ！ うん！なんとなく察してたさ！だって兄妹だもんな！兄妹の兄はシスコンの可能性高いもん！こまったもんだぜアハハって笑い事じゃ

ねーよ！重症だぞー！これもし俺が勝つたらめんどうくさいことになるから手を抜くしかないじゃん！と考えてたら

愛「今だ！」

悠「あつ やべえ…」

愛「やつたー！」

あー 考えてたら取られちゃつたよ…てかマジで怖ーよ修兎。てかメガネしてるからあれやんシスコン番長やん。それ菜々子は俺が守るみたいに愛は僕が守るってかい！やっぱりシスコンは強いわー

悠「いやー負けちつた 強くなつたなー愛（ヨシヨシ）」

愛「うっ うん／／／」

あつこれやつたか？やつてしまったか？と思い修兎を見ると

修兎「悠あとで話したいことあるのだが？」

あつこれはお話しじゃなくてO☆H A☆N A☆S H Iのほうだった解せぬ

第3話お日さま園に別れを

あれからまた数年がたち今は小学三年生ぐらいになった　え？またはぶいた？やめて毎回の日常書いたら何年間も書き続けることになるよ！もうやめて！主のライフはゼロよ！　誰だよ！ドローしてモンスターカード出たら再攻撃できるカードを使ってるやつ…あれまじでえぐかったから冗談抜きでリアルでそれやられたら友情破壊ゲームみたいになるわ　絶交レベルだよ…

そんなことより原作通りにはやはり引き取られ稲妻町に行き円堂に会わないと行けないらしい

ちなみに俺の予想通り苗字は石田だった　え？捻りがない馬鹿野郎！こつちだつて大変なんだよ！　あれとかあれとかあれとかがね！あれしか言つてないじゃねーかよ俺まああれはこのあとのお楽しみつて誰に言つてるんだ俺メタすぎるわ!!

そんなことよりその話を1週間前に瞳子さんから…

瞳子「悠　1週間後に引き取ってくれる人が来るから準備しなさい」

悠「姉さん　このことはみんなには内緒にしてくれないかな？　当日になったらサブライズみたいな感じにしたいから」

瞳子「いいけど…なんで また？」

悠「いや… 一週間前に言ったらみんな泣き過ぎて心が…ちよつと…」

そうそれなんだよねーこれを1週間前に言ったらみんなウアンウアン泣き心が痛い

… それと別れは急にやってみんなにサプライズをして驚かせてから別れたいのだ

悠「だからお願い！お姉さん！このことは当日までみんなに内緒にして！ 当日にみ

んなに見せた方がいいものがあるから!!」

瞳子「悠がそうしたいならいいよ」

悠「ありがとう！サプライズ楽しみにしてね!!」

こうしてサプライズの用意をしながら1週間経ったんだがこの時この話を聞いてた

人があるなんて思ってもいなかった…

??? side

??? 「悠くんがどっか行く!? そんな… (グスン) 早くみんなに知らせてこつちもサプラ

イズしないと!!」

悠 side

引き取られる日前日

悠「よーし 前日にサプライズの準備が出来て良かったあぶねーこれ当日までに成功

してなかったらサプライズの意味全然ないじゃん」

??? 「なにこそこそしてるの?」

悠 「誰!? ってなんだよ玲名かよおどかせるなよ!」

玲名 「コソコソしてるのが悪いんじゃない!」

彼女は八神玲名そうガイヤ又はジェネシスの副キャプテンのウルビダだ え? わかりやすく? んー中の人が雷門の誰かと同じでやんす!

え? なんでみんな栗松ってわかつたの!? エスパ!?! あっ 語尾にやんすって付けちやつたてへっ。 :。 *。 . いやー中の人はすごいね! うん! 声を変えて性別も凌駕するんだもん!

てか危なかったわこれバレたらサプライズ台無しになるところだったよ: : : てか何みんな勘がよすぎない? 前にも誰かが来てたんだけど: :

やだ: : : もしかして: : : ストーカー? んなわけあるかアホ本当だったらお兄ちゃんシヨツクだよ: : : あっこのネタは前にもしたんだったわ

悠 「それよりどうしたの?」

玲名 「あつ そうだった! もう少しで夕飯だから来てってお姉ちゃんが言ってたよ。」

悠 「わかつた。今いくよ。」

こうしてみんなと最後の夕飯を食べることになった

く 別れの日当日く

ついにきてしまったかーうん夜あまり寝れなかったよ緊張しすぎてやつべーべーよヤバすぎてどこぞの戸部になってしまったよー べーべーになったよそんなことよりみんなに話さないとまあ悲しいけどまた会えるしね！なんだろう…せつない…

瞳子「みんなー集まってー悠から話したいことあるって」

悠「実はね…今日でみんなと別れないといけないうことになったんだだけだ…」

「「「うそでしょ!?!?!」」」

まあそーなるよねサプライズなんだもんうんうん てかウエンウエン泣くよ本当に心が痛いわこの光景

悠「それでサプライズなんだけど みんなちよつと外に出てくれない？」

そう言った俺はみんなを外に連れ出しグラウンドに着いた

悠「みんな来た？それじゃあサプライズいくよー」

そう言うって俺はボールを上空に蹴りその後自分も飛びそして必殺技を叫びゴールに向かって蹴った

悠「星砕き!!!」

みんな「「「えー!?」」」

あれとは必殺技だったのだ!! もうこれ考えるのに苦労したんだよどんな感じにしようとかめちやくちや練ったよやつぱりお日さま園だから宇宙系にしようと考えた

のはいいとけど一番いいの思ったのこれしかなかったもん

悠「どーだった？」

晴矢「嘘だろ!?!俺もまだ必殺技完成してないのに完成しやがって!」

治「さすが俺のライバルの悠だ!」

いや いつにライバルになったんだよ:聞いたことないぞ?

杏「いつそんな技考えたの!また抜かされたじゃん!」

クララ「・・・(コクン)」

悠「いやサプライズなんだから当たり前だろ?」

そう呑気に言っているとタツヤが話しかけてきた

タツヤ「悠くん 実はね僕達もサプライズがあるんだよ!」

悠「え? 嘘? もしかして話聞こえてた?」

タツヤ「うん: 最初は聞いた時悲しかったけどまた会えると思って!これサプライ

ズのプレゼント!」

わーお 見事にフラグを立てたよこの子まあ中二になったら会うんだけどね!

悠「うん!ありがとう!みんな!」

そしてプレゼントの集合写真とペンダントをもらい門の前に行くとき先に誰かがいた

星二郎「おお悠来たかお前の新しい家族が待ってるぞ」

瞳子「お父さん!？」

悠「おじさん来てたの!？」

まじかこれは驚いたてつきり次に会うのはエイリアン学園の本拠地でやるジエネシ
ス戦だと思ってたよまあお日さま園作った人だから来るよね

悠「おじさん 今までありがとうございました。いつかまた会おうね!」

星二郎「そうだな いつかまた会おう」

悠「うん!」

こうして星二郎にも別れを告げ車に乗り最後に別れの言葉言った

悠「みんな!また一緒にサッカーやろう!。そしてまたやる時は俺より強くなれよ

!」

こうして最後の言葉を告げお日さま園のみんなに別れを告げた:

次会うときは敵同士になるのか:嫌:だな:

第4話〇〇との出会い

お日さま園の別れから2週間が経ち今はここ稲妻町にいる

いやーついにきたよ！稲妻町！聖地みたいな感じだよこれ！前世は聖地なんてないからね！アツハハハハハハハハ　　ないよね？本当に？あつたら俺ミーハーなんて言われちゃうよ！

そんなことより今は俺がこっちの家の準備とかで忙しくまだ小学校に通ってない通うのは次の日になっていて今は準備が終わり近くの河川敷でサッカーを1人でしていた

悠「んーやつぱり　小学校ついていっぱいあるからそう簡単に会えるわけないよなー
しようがない必殺技を強化しないとなー」

そう言いながらボールを上空に蹴り自分も飛びゴールに向かって蹴った

悠「星砕き!!!」

と叫びボールはゴールに突き刺さったそして後ろから元気な声が聞こえた

???「おまえすげーなこんな必殺技みたことないぞ！」

あれ？これもしかしてあれかな？あれなのかな？

そう思い後ろを振り向き 少年に話す

悠 「あ、ありがとう！この技、結構特訓して覚えた技なんだよね！」

??? 「そうなのか！ あっ！俺 円堂 守 お前名前なんて言うんだ？」

悠 「俺の名前は 石田 悠 気軽に悠って呼んで！よろしく！円堂！」

円堂 「よろしくな悠！ その必殺技どうやって覚えたんだ？」

悠 「うん 実はね・・・」

うん！ やっぱり円堂だったよ！ やったね！ たえちゃん！ え？ 誰？ おいやめるとか言ったの？ 空耳かな？ 空耳だようん！ 気のせいだよ気のせい そんなことよりどうやって必殺技を覚えたのかを円堂に話したすると

円堂 「やっぱり 悠はすげーな！ 俺も必殺技を早く覚えてたいよ！」

悠 「そうありがとう てか円堂はどんな技を覚えたいの？」

円堂 「そうだなー 1番目に覚えたいのはこれかな？」

そう言つて円堂は大介さんが書いた必殺技のノートを見せてくれた。

あーうんうんこれは分からないわこれ

悠 「ごめん読めないわ…なんて書いてあるの？」

円堂 「これはゴツトハンドと言つてじいちゃんが最初に覚えたGKの必殺技なんだつて！」

悠「つてことは、円堂はGKをやりたいの？」

円堂「そうだな！悠はどこやりたいんだ？」

悠「俺？俺はGK以外だったらどこでもいいかな？ サッカーができるだけで楽しいもん」

円堂「やつぱりそうだよな！サッカーは楽しいよな！」

やつぱり円堂は小さい時からサッカーバカらしいやつぱりこうゆう奴にみんな引つ張られて成長するんだろうなーよしあれを言うか

悠「円堂！俺たち小学生の時はサッカーチームに入つて、そして！中学生になったら部活に入つてフットボールフロンティアに出て優勝しようぜ！」

円堂「ごめん。俺母ちゃんやんがサッカーチームには入れさせないって、だけど！中学生になつたら一緒に雷門中に入つて、そんで一緒にフットボールフロンティアで優勝だ！！」

悠「いいね！それ！やつぱりフットボールフロンティアで優勝したいよな！」

円堂「そうだな！俺たちで優勝するぞ！」

悠「うん！」

こうして 円堂と約束し一緒にサッカーをして強くなつていき、そして中学生になるのであったが

「次の日の小学校」

先生「えー 今日新しくきたお友達を紹介するぞ。入って来てくれ。」

悠「はい！」

先生「では自己紹介してくれ。」

悠「はじめまして 石田 悠です。よろしくあー！悠！」 円堂「お前この学校だったの!?! 驚いた！」

先生「静かにしろ！ 円堂！ 石田！」

悠 円堂「ごめんなさい」

さすがに小学校は同じじゃないと思ってたけど小学校が同じだった。わーいこれから楽しいことが盛り沢山だー

第5話雷門中サッカー部始動!!そして未来からの来訪者

!

あれからさらに経ち　いまは、ピカピカの中学1年生だ、やばいピカピカの1年生とか言うところのあの本を思い出す　あの本買ったこと無かったけどね…

そう重要なのは1年生だ!そう、1年生と言えば原作通りになるとサッカー部を作り夕方の河川敷で襲われるのが原作だ。え?襲われるつて誰?ストーカー?そんなわけないだろ!FPSでよく言われてる奴らに襲われるだよ!これ以上人物を言うとなタバレになるんだよ!

そんなことはさておき俺と円堂は冬海先生にサッカー部に入部しに話に来た

悠　円堂「サッカー部入部希望です!」

そして冬海先生はため息をついたあと言った

冬海「悪いけど　この学校にサッカー部はないんだ」

悠　円堂「えー!!!」

と俺達が叫んだ後に廊下の方で叫んだやつが居るが気のせいだろう

悠「どうすればサッカー部を作れますか?」

冬海「部室棟にある物置部屋を掃除したらサッカー部を認めます」

悠「だってよ 円堂掃除したらサッカー部作れるってよ」

円堂「本当ですか!?! 任してください!やろうぜ悠!」

こうして俺と円堂そして小学校で友達になった木野がマネージャーとなり俺たち3人で掃除することになった

悠「じゃあ 開けるぞ セーの!あっちよ! (ガッシャーン)」

円堂 木野「大丈夫!?!悠 (くん)」

悠「う…うん…大丈夫… それにしても適当に詰めすぎでしょ!これ危ねーよ!」

木野「まあ しょうがないよ 物置部屋なんだしそれより掃除しましょ」

円堂「そうだな!! それじゃ始めるか!」

そして俺たち3人はせっせと掃除を始めた物置の中には謎の物や卒業生が使ったであろう文化祭の物更にはくす玉や何故かある招き猫などもあった 誰だよ招き猫入れたの物置に猫あると食いしん坊の女の子思い出すよ!あれマジで面白かったな…

そう考えながら掃除してるとあるものが見つかった

悠「ん、なんだこれ?」

木野「どうしたの?悠くん?」

円堂「ちよっと貸してみろ…これは!?!サッカー部の看板じゃないか!」

悠「まじか！ ラッキーだな！早速入口に付けようぜ！」

いやーまじかあの伝説の看板を見つけたぞ俺てかこれが看板かー地味にでかいなこれ…

→部室入口

円堂「こんな感じでいいか？」

木野「大丈夫だと思っよ？」

悠「よし！じゃあ！雷門中サッカー部！」

「「始動!!」」

こうして看板を付けて俺たち3人はサッカー部を作った

それから色々と手続きをし夕方の河川敷での事だ

円堂「サッカー部できるといいなー」

木野「円堂くんと悠くんがサッカー部を作るんだね。」

悠「そうだなー まずは部員を増やさないと試合どころか練習もできないな 頑張らないとな！」

木野「うん！2人ならできるよ！」

円堂「そっかー できると思っのか！」

と楽しく喋りながら下校してた俺たちだがもう少しであいつらが来てしまう

円堂「俺 サッカー部が出来たらいろいろとやりたいんだ フットボールフロンティアという大会があつて悠と一緒に「無駄だ。」

そして目の前に変な服をきた奴が現れた

??? 「雷門にサッカー部は、できない。」

円堂「悠か木野の知り合い?」

木野「うーん 私知らない?」

悠「俺もそんな服をきた知り合いなんて知らないよ?」

??? 「サッカー部はできない。確実に。」

原作知ってるけど本当に何言ってるんだこいつ? 頭でも打ったか?

円堂「どうしてそー決めつけるんだ? わかんないだろう! サッカー部は作れるさ!

本当にサッカーが好きなのやつが集まれば!」

??? 「サッカーが好きなのやつなどいない。」

悠「何言ってるんだ? サッカーが好きなのやつならいるだろ?」

悠 円堂「ここにな!」

木野「ふ 2人とも」

??? 「嫌いになる。まもなく。」

円堂「俺達はサッカーを嫌いになるなんてならないぞ」

悠「そうだ！嫌いなるわけない！寝言は寝て言え！」

そう俺らが言ったすると敵のリーダーが何かをした

???「そうか。」

<MOVE MODE>

謎の声がしそのボールが強烈な光を放ったそして後ろから謎の声が聞こえた

???「大変だ！」

???「僕達も行こう！」

そして強烈な光が無くなり目を開けるとそこには俺たちの目指す場所フットボールフロンティアスタジアムに居た

木野「ここは？」

???「お前達がサッカーを奪われるふさわしい場所だ」

悠「ここは!?!もしかしてフットボールフロンティアスタジアムか!?!」

円堂「本当か!?!悠」

悠「あー間違いないでこれからどうするんだ?リーダーさんよ」

???「これから君たちにはをサッカーをやってもらおう。試合だ。」

円堂「え?試合ってどうゆう事だよ?」

そうそうどうゆう事だってばよ?やべここでふざけるのは場違いかそう考えてたら

ベンチ方面から2人と謎の生物が走ってきた

??? 「悠さん!! 円堂監督! じゃなかった! 円堂さん!! そいつらはサッカーを消そうとしてるんです。」

悠 「えーとお前誰だ?」

??? 「あつ 俺 松風 天馬と言います。 えーと、あのー、いろいろ説明難しいんですけど、俺! 大好きなサッカーを守るためにここに来ました! あいつらはプロトコル・オメガって言うチームであいつはアルファって言って、あいつらのせいでこのままじゃ大変な事になるんです! 信じてください!」

円堂 「ああ! わかった!」

天馬 「信じてくれるんですか!」

悠 「そうだな サッカーが好きなのことは信じるだろ? 円堂?」

円堂 「ああ! そうだな悠! 大好きなものには嘘はつけないからな!
今のこと本当なんだな?」

アルファ 「そうだ。」

円堂 「試合やるよ、やってやる! やつてお前達にサッカーが楽しいってとこ教えてやる!」

悠 「そうだな! 絶対負けねーよ! でもよ相手は人数揃っててこっちはいないんだよ

なー 木野は危ないからやらせたくないし」

??? 「大丈夫いるよ。」

天馬 「みんなサッカーが好きなの仲間ですそして彼はフェイです」

フェイ 「やあ 悠くんは円堂くんはじめまして僕はフェイよろしくね♪」

天馬がフェイを紹介しているとあいつらが仲間同士で喋ってた

エイナム 「奴らは？」

アルファ 「・・・情報を受け取った、奴らは我々の修正を取り消そうと時間移動をしている、他のパラレルワールドの我々と戦っているようだ」

エイナム 「なるほど、どうします？」

アルファ 「円堂 守と松風 天馬 そして、石田 悠3人まとめてサッカーを奪えばいい事だ」

そして 矢島が転送された驚きを隠せず大声で叫んだ

てかこの人かわいそーだなー毎回転送させられて奥さんよく離婚しなかつたなこれ
:

矢島 「・・・なんだこれ お おーお!?店の厨房かと思つたらどこかのサッカー場だあ
!?!」

そしてマイクが光だし矢島を洗脳した

アルファ「頼んだぞ。」

矢島「さー!再びテンマーズ対プロトコル・オメガの試合だー!」

そしてコイントスされプロトコル・オメガのボールでスタートだ

悠「円堂!これが俺たちにとつて最初の試合だがんばろーぜ!」

円堂「そうだな!勝とうぜ!悠!」

木野「2人とも頑張つてね!」

悠「円堂」「おう!」

天馬「円堂さんと悠さんと俺サッカーするなんて感激だなー!」

フェイ「そうだね!天馬楽しもう!」

天馬「うん!」

こうしてテンマーズ対プロトコル・オメガの試合がはじまる

円堂「さあ みんな! サッカーやろうぜ!」

そして試合のホイッスルが鳴った:

第6話 プロトコル・オメガとの戦い

試合が始まる…正直ワクワクしてる自分がある 転生して初めての試合なのだから
だ

てか天馬も俺と同じ気持ちなのかなー あいつ円堂と一緒にサッカーが出来て感激
だなーとか思ってたそう それと俺たちのフォーメーションはこんな感じだ

F W ドリル フェイ キモロ

M F マント 悠 天馬(C)

D F デブーン ストロー スマイル ウォーリー

G K 円堂

の4ー3ー3のフォーメーションだ え？なんでこんなフォーメーションなんだつ
て？そりゃあれだよゲームとかでのポジションになるとこれが1番かなって思ったか
らだよ てか試合前のフォーメーションの話で

悠「天馬 俺は中盤の真ん中でいいの？」

天馬「は はい！大丈夫です！」

なんだろう俺脅してる感じがするよこれ決して脅してないからね！

頭の中で茶番をしてたらホイッスルがなり試合が開始された

ピーーーーー

開始とともに フェイにエイナム エイザ クオースがマークしフェイを動けなく
しそしてアルファがキモロに向かってボールを蹴った

アルファ「っ！」

キモロ「うっわ！」

そしてアルファは マント ウォーリー ストローそしてスマイルにもキモロと同じことをした

木野「酷い……」

ワンダバ「敵はデユプリが遠隔操作だと知って、フェイの視界をさえぎって、デユプリを痛めつけてるのだ」

まじかよここまでえぐいのかよデユプリを痛めつけフェイにダメージを与えてるのかよ……このままだとフェイが危ないな……そう考えていたらアルファはデユプリに向かってシュートを打つのをやめた

円堂「待てよ、サッカーは……サッカーは！そんなんじゃないぞ！」

天馬「円堂さん……」

円堂「さあーうってこい！」

悠「円堂大丈夫なのか!? あいつのシユート相当だぞ!」

円堂「大丈夫! 止めてみせる!」

アルファ「石田 悠の言う通りだ、自らの能力を把握出来てない、」

おいおい相手さんもそう言ってるぞ相当舐められてるなこれ:

円堂「それがどうした! やって見なくつちや分かんないだろ!? お前達がやってるのは

サッカーじゃない、ボールは人を傷つけるものじゃない!」

天馬「そうだ! サッカーが悲しんでる!」

円堂「お前いいこと言うなー! えっ えっと? 天馬って言ったっけ!」

悠「お前仲間の名前ぐらい覚えとけよ! 可愛そうだろ! だけどお前らはサッカープレイヤーとして三流以下のことをしてる!」

天馬「はい! 二人とも! アルファ、ボールだってそんなふうに使われて、泣いてるぞ!」

アルファ「サッカーは滅ぶべきもの、よって 円堂 守、石田 悠、サッカーによってお前達自身が滅ぶ」

そしてアルファはボールを浮かし喋った

アルファ「これより、円堂 守、石田 悠のインタラプト修正に入る。」

そして矢島が実況した

矢島「アルファ対円堂の一騎打ちだあ！果たしてどうなる!？」

そしてアルファはゴールに向かってシュートを打った

アルファ「っ！」

悠「円堂！」

円堂「このシュート絶対にとめる！サッカーが減んでたまるか！」

そして円堂の右手からエネルギーを放ち本来では出てこない必殺技が出る

円堂「ゴッドハンド!!!」

天馬「ゴッドハンド!?!」

悠「あいつ！土壇場で必殺技がでやがった！」

そしてアルファのシュートと円堂のゴッドハンドのパワー勝負になり 若干押され

ている

円堂「ぐっ…」

フェイ「まさか…ここで…」

アルファ「!？」

木野「すごい！」

ワンダバ「パラレルワールドの共鳴現象！」

円堂はアルファのシュートに押されていたが押し返しシュートをキャッチし防いだ

円堂「・・・はア：!?!止めた：?できた!!とうとう出来たぞ!!」

そしてアルファが本部と連絡をしている

アルファ「イエス」

天馬「よし、今ので流れがこっちに来ます！ フェイ！悠さん！そしてデュプリのみ
んなも上がって！反撃行くよ！」

そしてみんなが上がった

円堂「いくぞ！」

そして円堂ボールをハーフラインまで蹴って天馬にパスしたがネタンに競り負け
ジーニーにボールが渡ってしまう

矢島「さあ！ボールはプロトコル・オメガに渡ってしまう！」

天馬「逃がさない！」

そう天馬が言い急激に素早くなった

悠「え!?!」

木野「あの子速い！」

ワンダバ「急激に成長しとる！」

矢島「速い速い！すごいスピードだ！」

そして天馬はジーニーを捉え必殺技をだした

天馬「ワンダートラップ!!!」

天馬は、ワンダートラップをだしジーニーかボールを奪った

円堂「いいぞ!天馬!」

フェイ「あの加速:時空の影響か!」

そしてアルファが味方に指示を出した

アルファ「潰せ」

味方に指示をだし ネタンとクオルが潰しに天馬に襲ってきたが、天馬はまた新たな

必殺技を出した

天馬「アグレッシブビード!!!」

必殺技が炸裂しネタン、クオルを抜いた

円堂「あいつ、スゲーな!」

そして天馬から俺にパスが来る

天馬「悠さん!」

悠「はいよ!」

天馬からパスをもらい相手チームのゴールに向かいドリブルしたそしてアルファは

また指示をだした

アルファ「ザノウ攻撃を警戒 メダム潰せ」

ザノウ メダム 「イエス。」

ザノウはシュートに警戒しメダムを俺に向かって潰しにかかった

悠 「2人が活躍してるんだ！俺も活躍しないとな！」

そう叫びドリブルしてると力がみなぎり新たな必殺技が炸裂した

悠 「花鳥風月（かちょうふうげつ）!!!」

と叫び俺の目の前に水が湧き上がったそして俺の影が写ったそしてメダムがそのまま突進したがそれは幻でメダムの後ろに新たな水が湧き上がっていてそこから俺が出現しメダムを抜いた

天馬 「えー!?悠さんも!？」

フェイ 「悠くんもパラレルワールドの共鳴現象が起こっている!？」

えっ?俺のこの技に共鳴現象なの!?まじかーこの技いつの時に使えるようになるんだよこれ:

そしてゴールは俺とザノウの一騎打ちになり ボールは打ち上げ自分も飛び必殺技をだした

悠 「星砕き!!!」

そしてキーパーのザノウも必殺技をだした

ザノウ 「キーパーコマンド03!!!（ドーンシャウト）」

ザノウは必殺技を出したがシュートの威力は落ちずそのままゴールに突き刺さった矢島「ゴーーーーール!!!先制したのはテンマーズだあ!」

悠「見たか!俺の必殺技!伊達に小さい頃から使ってる技だからな!」

天馬「あれが、悠さんの伝説の星砕き!!」

フェイ「さすが悠くん!すごいね!」

円堂「悠もすごいけど、あいつらもスゲーな!」

そして得点は1-0で俺達が有利だ。そしてまたプロトコル・オメガのボールで再開
ピーーーーー!!!

アルファからエイザにパス。そしてエイザはテンマーズの陣地にロングパスをした

矢島「1-0でテンマーズが優勢!プロトコル・オメガ一気に攻めあがっていく!」

フェイ「くるぞぞ!」

そしてパスはエイナムに届きエイナムがアルファにパス。そしてアルファはシュート体制に入った。

アルファ「シュートコマンド01!!!(スピニングランザム)」

アルファは強烈な必殺シュートを放った

円堂「今度も止める!」

そう言い気合を入れてると、円堂の周りに謎の光が放つ

円堂「(力がみなぎってくる…)」

円堂の放つ謎の光によりみんなが驚いた

悠「なんだ!?!あの光は!?!」

アルファ「この光の圧力は…」

そして円堂の背中から謎の魔人が現れた

円堂『魔人グレイト!!!』

天馬「えー!?!円堂さんが化身使いに!?!」

木野「す、すごい、」

ワンダバ「んー!!すごいすぎるー!!」

円堂は魔人グレイトをだし化身技を放った

円堂「グレイト・ザ・ハンド!!!!」

アルファ「っ!?!」

エイザ「なに!?!」

矢島「と、止めたー!?!あの超絶シユートをキーパー円堂見事にキャッチ!!今度のテン

マーズはすごい!!」

おーこれが化身が実物見ると迫力あるなーこれ

円堂「…なんだったんだ?いまの?」

天馬「化身ですよ！」

悠「化身ってなんだそれ？」

フェイ「これが時空との共鳴これほどの進化をするなんて…」

そしてベンチでは

ワンダバ「んーあつーいー!!!」

木野「なんでピンク色？」

ワンダバ「これはエキサイティングゲージ！興奮するところなるのだ!!」

ワンダバは青からピンク色に変わったか興奮するとピンクになるとかやだーハシ
タナイーえ？それはお前の頭だ？何言ってるの？そんなわけないじゃん！

円堂「どうだ！俺達はサッカーなんて嫌いにならないぞ！」

悠「そうだ！俺たちはサッカーを捨てない！」

天馬「円堂監督と悠さんにサッカー部を作ってもらおう、そのために絶対この試合負けられない…雷門中サッカー部がサッカーの未来なんだから…」

そして試合が進み今が俺達が攻めている

矢島「1-0でテンマーズがリード！」

そしてドリルがフェイにパスする

ドリル「フェイ！」

フエイ「おう！」

フエイはパスを貰おうとするがクオースが邪魔をしパスが貰えずラインを切った
ピーー

天馬「フエイ!?大丈夫？」

フエイ「ああ！」

悠「あいつデュプリのコントロールもして大変なのは分かってるが人数がな……」

本場に1番キツいのはフエイだよなだけどこつちには人数がいなくてキツいの誰か
助けに来て欲しいなこれ……

そう思っている観客席から謎の声が聞こえた……

???「おーい！ この試合俺も入れてくれないか？」

天馬「剣城？」

え？ 剣城？ 剣城っていったか？ 普通この時代に来れるのか？ わかってるだろうって？
えー分かってますよ！ もうちよつと空気読んでよ！ 空気を！

そしてまたアルファは本部と連絡をした

アルファ「イエス、何者か判明、剣城 京介のインタラプト修正によって生じた エ
ラーだ。」

エイナム「エラーならば正すまでです。」

そして謎の人がベンチのまで来た。そして天馬が謎の人に向かって走って行った。

天馬「剣城！来てくれたんだな！あれ？剣城？」

???「俺は君が知っている京介ではない。京介の兄 剣城 優一だ。」

天馬「優一さん？」

なんだこれ？仲間だと思ってた。その兄弟とか気まずいやろそれ……
すると

優一「天馬くんだね？」

天馬「足はもういいんですか？」

優一「話はあとだ、まずは戦おう」

天馬「はい！」

そうベンチで2人が話してるのを見て俺と円堂。そしてフェイは円堂「んー誰だ？」

フェイ「どうやらパラレルワールドから来た強い味方のようだよ」

悠「パラレルワールドは分からないけどまあ味方だったらいいか」

と俺達が話しているとアルファは天馬と優一の方へ歩いて喋った

アルファ「お前は再修正される。」

優一「それはどうかな？」

うわーバチバチしてるよーこの2人まあ優一が出るから選手交代かな？

そう考えた矢先にワンダバが動いた

ワンダバ「選手交代だ！キモロ！」

ワンダバが選手交代を告げキモロが消えた

矢島「テンマーズ！キモロに変わって剣城 優一が入ります。」

そして優一がフィールドに入ってきた

天馬「俺、嬉しいです。優一さんとサッカーが出来て。」

優一「俺もだ。それにあの人達と一緒にプレーできるなんて」

悠「味方になってくれてありがとうございます。ゴールはあいつが」

円堂「守りは任せてください！」

そして試合が再開される

矢島「さあ！再開です！」

クオースのスロインからジーニーに渡ったそしてすぐに優一がジーニーからボールをとりドリブルしネタン、クオル そしてメダムを躰しゴールに向かってドリブルをする

天馬「うまい！これが優一さんのサッカー…」

フェイ「圧倒的だ…」

そして天馬が優一の方に行き何かを喋ってた

優一「天馬くん 化身だ！」

天馬「え？」

優一「いくぞ！」

天馬「はい！」

そう言つて2人はゴールに向かって走つていった

そして優一が背中から何かを出した

優一『魔剣士ペンドラゴン
!!!!!!』

「!!!?!」

みんな優一が化身を出したことに驚きを隠せないけどさらに優一は隠し持っていた

優一『アームド!!!』

優一がアームドと叫ぶとまるで鎧のように優一のことを身に纏う

天馬「優一さんが化身アームドを!?!」

フェイ「天馬!君にもできるよ!やってみて！」

天馬「俺にも…できる!いくぞ！」

天馬はそう叫び化身をだしアームドをするのだった

天馬『魔神 ペガサスアーク!!!!アームド!!!
そう叫び天馬も化身を身に纏う!!!!』

悠「なにそれスゲー」

天馬「できた…俺にもできました！」

優一「さあ！いくぞ！」

天馬「はい！」

そして2人は再びゴール向かって走るすると目の前にアルファも負けじと化身をだしアームドするのであった

アルファ『天空の支配者 鳳凰!!!! アームド!!!!』

矢島「アルファも化身アームドだあ！」

もうこれ化身アームドのバーゲンセールだわ

そして優一から天馬に上空にパスそして天馬が飛び負けじとアルファも飛び蹴り合
いになっている

アルファ「っ！」

天馬「まけるかー！」

がしかしお互いのパワーが互角でボールが空に上空にいったがそれを俺は取った

悠「まったたく！ みんな進化しすぎだろ！」

俺も頑張らねーといけないうのに!?なんだこのパワーは!?これなら・・・よし!

悠「(お日さま園のみんな力をかしてくれ!)」

と心の中で叫んでたらお日さま園のみんなから貰ったペンダントが光った気がするするとパワーがさらに上がった感じがした

そして俺は化身の名前を叫び、呼び出した

悠『宇宙の覇者 コスモ!!!』

天馬「悠さんも化身を!?!」

ワンダバ「超!エキサイティング!!!」

おいやめろそれはバトルボールだ相手のゴールにシュートはあってるけど

心の中でツツコミながら化身技を炸裂した

悠「コスモ・ブレイク!!!」

必殺技を叫びシュートはゴールに向かう ザノウはシュートの威力に負け吹き飛ばされたそして

矢島「ゴール!!テンマーズ2点目!」

天馬「悠さん!凄いいじゃないですか!化身を出すなんて!」

悠「いやーごめんな天馬、なんかゴールを横取りした感じになっちゃってそれと天馬と優一さんもすごかったよなんか身に纏ってたしよ!」

優一「いや悠さんもすごいですよ本当ならまだ化身も出せないんですから」

悠「え？ なにそれ？ まじすか？」

フェイ「本当だよ、悠くんも円堂くんはまだ新しい必殺技それと化身を発動するなんて起こらなかつたんだよ」

えーまじでー どころのブロッコリー先輩は都市伝説とか言つてたでこれ？ 都市伝説じゃなくなるじゃんこれ！

すると円堂もこつちに来た

円堂「悠！ お前も化身がなんかドバーとなつてたな！」

悠「いや、擬音語で説明しないでよ分かりにくい…」

そして俺たちがワイワイしてると

アルファ達、プロトコル・オメガは、本部からの命令で撤収しようとしてた

円堂「っ!?!なんだ!?! UFO?」

そしてプロトコル・オメガは消えた…

フェイ「守つたんだ、 円堂 守と石田 悠のサッカー部結成を僕達が守つたんだよ

！」

天馬「つてことは、勝つたんだよね!?! やつたー！」

天馬とフェイが喜んでいると隣で円堂が考えてた

円堂「なにがなんだか？」

悠「んー試合に勝ったんじゃないの？ 相手がいなくなっただし素直に喜べよ」

円堂「そうか！ 勝ったのかヨッシャー！」

そしてフェイが優一に話しかけた

フェイ「ありがとう。優一さん」

優一「この戦い俺にも手伝わせてくれ」

天馬「優一さんも!？」

優一「京介のためにもね」

そして俺たちは試合が終わりグラウンドで話し合っていた

天馬が知る優一は12歳 京介が7歳の時に事故で足が動かなくなってしまった、になっっているが今の優一は、その事故が起こらなかつたらしい

そして2人にサッカー留学の話がきたが、京介は兄の優一を留学させるためサッカーに関係するものを全て捨ててしまったのだ。原因はプロトコル・オメガによるインタラプト修正だ。そして優一にも襲ってきたのである。だけどサッカーができ時空を超えたのはある人に助けて貰ってうれしい。なんでも君たちみたいなサッカーを愛するものを支援してると言っていたのこと。

円堂「サッカーを愛するものを？」

木野「支援してる？」

そして優一はその人からタイムブレスレットをもらいここに来たという

悠「ようするにサッカーを守るために戦ってるんでしょ？」

天馬「そうです！」

円堂「なら！俺達も戦いたいぞ！」

悠「そうだな」

木野「2人がやらないといけないのは、サッカー部を作ることよ、それがサッカーを守るってことになるんじゃない？」

天馬「はい！そうです！ 2人がサッカー部を作ったらサッカーが喜びます！」

円堂「おまえ、面白いやつだな！」

悠「そうだね、円堂と同じくらい面白いよ。」

するとワンダバが急に大声を出した。

ワンダバ「さあ！諸君！この感動を胸に抱き、いざ、元の時代に戻るべし！」

天馬「はい！」

フェイ「タイムジャンプだね」

円堂「もう行っちゃうのか？」

フェイ「悠さんと円堂さんの時代の危機を救ったことであとの時代がどう変化したの

か見に行かなくちやね。優一さんのためにもね。」

こうして天馬達がタイムジャンプで帰ろうとしてたら円堂がしゃべった

円堂「雷門中サッカー部絶対作ってみせるぜ！」

悠「そして フットボールフロンティアで優勝してやるよ」

天馬「俺もサッカーを守ってがんばります！」

円堂「おう！でもつてもしまつてもまた会つたら……」

悠「そうだな、また会つたら……」

そして俺、円堂、天馬は拳を合わせ

「「「サッカーやろうぜ！」」」

そして天馬達はタイムジャンプして消えた……

木野「まだ夢見てるみたい」

円堂「天馬つてやつきつとまた会える、そんな気がする」

悠「じゃあ 天馬にまた会つたら驚かせるために強くなるのかな？」

サッカーやろうぜ！かお日さま園のみんなともいつか戦わないといけないけどいつ

かはまた楽しくサッカーできるのかな？

そう考えてペンダントを握りしめた。

こうして夢みたいいな本当に起こつた一日が終わってしまうのだが

悠「あれ？これ？どうやって帰るんだ？俺たち？」

円堂 木野「あっ……」

おい プロトコル・オメガ！お前らが元の場所に戻さないせいで俺達親に怒られた
じゃねーかふざけるな!!!お金飛んだじゃねーか！

FF編

第7話サッカーやろうぜ!

プロトコル・オメガとの試合から約1年が経ち今俺と円堂そして、木野は中2になった。

わーい中2だーだいたいここでなぞの病気になったりするよねーうんあれは鬼門だわーあれ? これもしかして恋!?とかいうのは病気ではありません! 絶滅危惧種です!

それはそうとこの1年の間には出来事があり最初は1年生の5月くらいに染岡と半田が入りサッカー部は4人にそして2年生になったら後輩の壁山、栗松、少林、穴戸が入ってサッカー部は8人になったんだけども…

円堂「さあ! 練習だ!」

悠「そう言ってるんだけど、こいつらやる気ないぞ?」

そんなんだよなーこいつらやる気ねーんだよなー最初はみんなやる気あつたけど今じゃ染岡は休憩、半田はマンガを読み、壁山はポテチを食い、穴戸は栗松がゲームをやっているの見てる、少林に至っては何故かカンフーをしている、おい! 少林に至っては別の部活だぞ! それ! 映画では少林サッカーはあるけどさあ!

円堂は痺れを切らし喋った

円堂「どうしたどうした？練習なんてずーとやってないんだぞ？」

染岡「グラウンド借りられたのかよ？」

悠「これからまたラグビー部に交渉するんだよ」

半田「だと思つた」

栗松「どーせ笑いもんになるだけでやんすよ」

穴戸「8人ぼっちならテニスコートで十分だろつて」

半田「グラウンドが空いてる日にやればいいんじゃないのー？」

やべえこいつ痛いところついてくるようわー

そう言われ円堂は悔しそうな顔をする

壁山「そうそう」

少林「空いたことないけど」

そして円堂がキレた

円堂「俺たちはサッカー部だろ!!今年こそ出ようぜ!なつ!みんな!」

そう言ってるがほかの部員が乗る気じやない

栗松「部員8人じゃ試合にならないでやんす」

穴戸「遅いそこでシユート」うるさいでやんす」

悠「お前達 サッカー部なのにサッカーしないとかふざけてるのかよ!」

円堂「悠の言う通りだぞ! まったく!」

そう言つて俺たちは部室を出たおまけに勢いよく扉を閉めたため看板が落つこちたがそこは持ち前の瞬発力で俺が直した

悠「あぶねーよ円堂!」

円堂「いやー悪い悪い それより2人で練習するか」

そして俺達が部室の前でパス練習していると木野が帰つてきた

木野「悠くん 円堂くんー」

円堂「おう どうだった?」

木野「ごめん、借りられなかった」

木野はラグビー部にグラウンドを借りられるか交渉したがダメだったみたいだ本当にあのラグビー部感じ悪いんだよなー 自分たち強いとか思っていていつか足元すくわれるぞ

悠「しゃーねーよ ダメ元で聞いてたし」

木野「みんなは?」

円堂「いつもと同じ」

木野「私言つてあげようか?」

悠「大丈夫やる？あいつらはいつかやる気になって戻ってくるそんな気がする」

円堂「そうだ、アイツらだつて本当はサッカーが大好きなんだから」

まあそうじゃないと入らないだろ？普通にな？あーお日さま園の時は人数多すぎたけど今じゃ少ねーさてとじゃああそこに行きますかねすると

木野「じゃあまた河川敷行くんだね、小学生のチームで練習になつてる？」

円堂「アイツら結構強いんだぜ？」

悠「てか小学生のサッカーチームでは有名な方だぜ？そんなぐらい覚えとけよ、本当にお前は何も調べないんだからよ……」

円堂「いやー悪い悪い」

そして俺たちは河川敷のグラウンドへ行き小学生とサッカーをしていた。そして今はシュート練習で俺の番だ

悠「よし！いくぞ！円堂！」

円堂「こい！悠！」

さーて今回は勝てるかなー？そう言っつていつもの必殺技をだした

悠「星砕き!!!」

そして円堂も必殺技で対抗した

円堂「ゴッドハンド!!!」

そう叫び技と技のぶつかり合いが起こり激しいぶつかり合いに勝ったのは

円堂「よし! 今回は俺が勝ったぞ!」

悠「あー負けちゃった これです159勝158敗かーあんまり勝てねーな」

なぜか知らないがプロトコル・オメガと戦ったの次の日から特訓してたら円堂はゴツドハンド 俺は花鳥風月が普通に出せるようになった。

化身も出せるようになったが体力の消費がヤバく俺たちの中で重要だと思つた時に出すように決めている。いやー本当にどうしようこれ帝国学園の練習試合で出るようになってるのにまあ多分どうにかなると思うけどね てか練習してたらグラウンド付近でガラの悪いの2人組が歩いてきてるうわーいかにもクズな感じがするなー

円堂「次はまこ! 打ってこい!」

まこ「いくよ、円堂ちゃん! やー!」

まこのシュートはゴールに向かわなくガラの悪い2人組の目の前に通り過ぎ、そして2人組はギリギリ避けた。

そして円堂と俺は2人組方へ行き謝りに行った

ガラの悪いリーダー「誰だ! こいつ蹴ったのは!」

円堂「大丈夫ですか? すいませんでした…あのーボールをつ?!」

円堂がボールを返してもらおうとお願するがリーダーの手下が円堂の腹を目掛け

て殴った

悠 「円堂!? てめえ…」

やべえこいつらキレそうだわこれ

ガラの悪いリーダー「ボールってこれか?」

そして手下は円堂の着てるユニホームの雷門の名前をみてしゃべった

ガラの悪い手下「あれ? 雷門中じゃねーの? 部員もぜんぜんいねえ弱小チームですよ。」

ガラの悪いリーダー「くだらねえ ガキ相手に球拾いか?」

ガラの悪い手下「リーダーお手本見せてはどうです?」

ガラの悪いリーダー「いいねーやってやろうじゃねーの」

そう言つてボールに唾を吐く

悠 円堂 「っ!?!」

こいつらマジで潰す! 完膚無きまでに潰す! そう思いながらもガラの悪いリーダーは強引で雑なシュートをした

ガラの悪いリーダー「あらよつと!」

そのシュートはまごに向かつてきた。

危ない! だけど間に合わない! そう思つてたら何者かがボールを蹴り返しガラの悪

いリーダーの顔面に向かってシュートに顔面に直撃した。

ガラの悪い手下「りっ　リーダー!?　って　てめえ!」

手下がキレたが何処からかとてもない気迫を放つてるやつがいた

悠「おめーら：円堂に暴力　そして、サッカーボールに唾を吐き　挙句の果てにまこに向かってシュートとは：いい度胸してんなおい：てめえら：確実に病院送りしてやるよ……!」

あまり怒らない俺だがこれ以上ない程にキレてた。

そしてその気迫におじけずいて手下がリーダーを担いでそのまま逃げていった。

そして慌てて円堂が俺の肩を掴み喋った

円堂「落ち着け!　悠!　アイツらはもう逃げたぞ!　冷静になれ!」

木野「そうよ!　悠くん!　落ち着いて!」

悠「あつ：そうだな：すまない：流石に円堂とまこがあんな目にあつたからついカツとなつてしまった：　てか大丈夫か!?　まこ?」

まこ「うっ　うん!　大丈夫だよ!　それにお兄さんありがとう!」

そしてまこを助けた青年が、まこの言葉で微笑みそのまま去ろうとしていたが、円堂が青年に話しかけた

円堂「おまえ!　スゲーなどこの学校なんだ?　良かったら一緒に練習しないか!」

円堂が青年に話したが青年はそのまま去っていった

円堂「おっおい！」

悠「円堂やめとけ、あいつにも事情があるだよ。」

円堂「そうだな…仕方ないか…」

そう円堂が言つて練習を再開した：

これは余談だか俺がマジギレした時、円堂と木野は俺を見て驚いてた。なにせ目が人を殺す目をし、さらに考えられないほど血管が浮かび上がってたため、めちやくちや怖かったそうだ。

俺は分からなかったけど2人がめちやくちや怖かったって言つてたのだからめちやくちや怖かったのだらう。てか殺す目つてなんだよどこぞの伝説のヤサイ人みたいにお前達を血祭りにあげてやるとか言つてる感じかな？こりや失敬失敬冷静みたいにならないとな

ん？冷静？冷静といえは氷？うん…まあ何となくのイメージが浮かんだわ。さーて！練習しますか！

第8話 メンバー大募集!

ガラの悪い奴らとの騒動から次の日の朝、俺たちは朝のホームルームで担任がみんなに転校生が居ると言って紹介するらしい。

あれ?これ来るよな?あいつ来るよね?

そう思ってたら転校生が入ってきた。

そして円堂は驚きを隠せず大声を出した。

円堂「あー!!おまえ!」

担任「なんだ?知り合いか?」

円堂「は、はい(じいちゃん:ありがとう!)」

担任「彼は、豪炎寺 修也くん。前は木戸川清修中学校だったな?」

豪炎寺「・・・はい」

てか木戸川ってあの兄弟が印象強いよな。まあ人としては嫌いだけど。

そして授業が始まり、そして、昼飯の時間に俺たちは豪炎寺に話しかけた。

円堂「豪炎寺:昨日ちゃんと自己紹介してなかったな。俺、円堂 守。サッカー部に入ってるんだ。ポジションはキーパー。お前も入らないか?木戸川清修ってサッカー

の名門なんだよな？通りであのキックすげーはずだぜ！」

悠 「円堂：お前グイグイやるなよ：困ってるじゃねーかよ。ごめんな？俺は石田悠。円堂と同じサッカー部で、ポジションはキーパー以外なら一応どこでもできる。よろしく。」

俺と円堂は自己紹介し、豪炎寺の返事を待つ。

豪炎寺 「サッカーはやめたんだ：」

円堂 「やめたってどうして？」

豪炎寺 「俺に構うな：」

悲しい顔をしながら豪炎寺は言い、教室から出て行ってしまった。

悠 「まあ：あまり無理に誘うのはよくねーよ」

そう話していると半田が教室に入ってきた。

半田 「円堂、悠。冬海先生がお前達を呼んでるぞ。校長室に來いってさ」

悠 円堂 「校長室？」

半田 「大事な話があるらしい：。俺：嫌な予感がするんだ：。例えば廃部の話とか

：

悠 円堂 「廃部!?!」

おいやめろ半田それフラグだぞ!?!なんでみんなそんなにフラグ言うの!?!言わないと

死ぬ病気?」

木野「私もそんな噂聞いたけど…」

悠「廃部にされるとか冗談だろ? 校長室に行つて確かめようぜ?」

円堂「そうだな! もしそうだったとしても廃部になんてさせるか!」

そして俺達は急いで校長室に向かった。部屋に居たのは顧問の冬海先生と校長先生、そして外を眺めてる女性が居た。

円堂「ハ ハナシツテナンデスカ?」

おいー円堂お前カタコトになつてるぞ! ロボットかよ! いやロボットは作られるけどよ…。

そして冬海先生は説明をした。

冬海「突然ですが、一週間後に久しぶりの練習試合をすることになりました。」

悠 円堂「し 試合って…試合? やれるんですか!?!」

冬海「相手は帝国学園です。」

円堂「帝国!?! あの最強という帝国ですか!?!」

悠「えー!?! うそつすよね?」

冬海「嘘ではありません。どうです? すごいでしょ?」

校長「この40年間フットボールフロンティアで優勝し続けている無敵の学校だよ。」

悠「ですが、なんでまたうちと？普通なら常連のチームと組むはずですが？それにうちはまだ8人ですよ？」

そう説明したら外を眺めてた女性が話してきた。

???「それなら集めてきたらどうかしら？集められない場合、あるいは試合に勝てなかったりしたらサッカー部は廃部。これは決定事項よ。」

そう言われ円堂は反論した。

円堂「勝手に決めんなよ！」

反論するのはいいけど：お前相手にしちやいけねーやつに喧嘩売ってるんだよな：

???「これは理事長と校長先生による決定事項でもあるのよ。あーんな出来たてほやほやの弱小クラブに回す予算なんてないわ。」

円堂「なにー！」

悠「円堂そのへんでやめたら？正直全て正論だし：オマケに理事長の娘で生徒会長の雷門 夏未だぞ？分が悪い」

校長「その通り！夏未お嬢様は理事長から学校の運営を任されているんだよ？彼女の言葉は理事長の言葉と同じだ。」

てかなんで理事長は娘に任せてるんだよ！いつもイエスばつか言っていないで仕事しろ！仕事！

そして円堂は顔を真っ赤かにして、校長室を出て行ってしまった。あまりに印象が悪く思ったため、俺は代わりに詫びを言った。

悠「いやー生徒会長なんかすみませんねー。うちのキャプテンが熱血なんで。」

夏末「いいえ、別に気にしていません。」

悠「そうですか？それじゃあ…あつ！それとあまり俺達のことをバカにすると痛い目に会いますよ？それじゃあ 失礼しましたー。」

そう言つて俺は校長室を出て、円堂に追いつき一緒に部室に戻つた。

そして円堂は部員達に伝えたが、みんな尋常じゃない冷や汗をかいていた。

染岡「で…おまえ！」

栗松「本当にやるつて言つたでやんすか…？」

円堂「やるさ！廃部になんてさせない！きつちりー人揃えてやる！」

悠「まあ、しちゃったもんはしやらないやろ？」

穴戸「ですけど、相手はあの帝国ですよ？絶対に無理！」

少林「ボコボコにされて恥かくだけですよ…」

半田「結局、廃部つてだけか…」

壁山「この部室ともおさらばつすね」

みんな空気重すぎるっしょ！そのまま核までいつちまうレベルだぞ！

そして円堂はまたもキレた。

円堂「お前らな！ サッカーを愛する気持ちがあるなら不可能だって可能になる！ なにも始まってないのに諦めちやだめだ！ 諦めちやだめなんだよ！」

そして円堂の熱弁は終わり、俺と円堂は部員集めをしに色々な所に行った。バスケットニス部 剣道部 水泳部に行き部員募集した。てか誰か俺らのことずっと見てた気がするけど気のせいだろう！ そして次は陸上部に行った。

あれ？ そう言えば陸上部はあいつがいたよな？ そう考えてたら円堂があいつを見て声をかけた。

円堂「おーい 風丸ー！」

風丸「円堂、そして悠じゃないか。どうしたんだ？」

まあ 陸上部と言ったら風丸だよなー まあ風丸とは円堂達と小学校からの同級生で中学生になる前の時あいつは陸上部入ると言っていた。

まあその時のあいつの目はガチだったから止めなかった。

悠「部員がないから集めてるんだよ。ところで風丸、お願いなんだがサッカー部に入ってくれないか？」

風丸「ふーん… サッカーね…」

円堂「風丸、お前一流プレイヤーと競ってみたいって言ってただろ？ もしやる気に

なったらいつでも言ってくれよ! 放課後は鉄塔前広場で練習してるから! あそこに来てくれてもいいや! それじゃあな!」

そう言つて円堂は、部員勧誘のために他の場所へ向かった。

風丸「一流つてのは陸上部なんだがな: それとお前も大変だな」

悠「まあしようがないよ。それと俺達は負けるわけにはいかない理由があるし。それじゃーね」

そう言つて俺も円堂のあとを追つた。そして円堂に追いつくと誰かと喋っていた。

悠「おーい 円堂どうした?」

円堂「悠! 今こいつにサッカー部を誘つてたんだ」

???「サッカー部? この僕が入るわけないだろ? せめてあと一人足りないって時にもう一度頼みに来たら?」

円堂「え? あと一人?」

???「そうさ、この目金が弱小サッカー部を救つた。なんてカツコイイじゃないか: フフツ:」

こいつキメ顔しながら去っていったぞ。口だけなのにこいつ:

そして新聞部から帝国学園との練習試合での意気込みを聞かれ円堂は、

円堂「部員募集の宣伝をしてくれないかな?」

悠「お前！バカか！意気込みを言うんだよ！」

という謎の茶番をした。

そして相撲部に行ったら、

相撲部部长「サッカーなんて軟弱の極み！日本男児なら相撲でゴワス！」

と言いつ堂を吹っ飛ばした。

親方！空から円堂が！いや違うなこれ…なにせ吹っ飛ばされてるもん…

その時木野は、みんなを説得してたらしいがキャプテンが乗り移ったとか言われて大いにズッコケをしてたらしい。

君たちあたり強くない？

そして下校時間になり俺たちは鉄塔前広場に行くと豪炎寺が居た。

円堂「豪炎寺！」

円堂が話しかけるが、豪炎寺はそのまま立ち去ろうとした。

円堂「此処すげーいい所だろ？俺達も此処はちっちゃい頃からのお気に入り場所なんだ！あのさ、お前も聞いているだろ？帝国学園との練習試合」

円堂はそう言ったら豪炎寺は目の色を変え、そしてまた悲しい顔をした。それでも円堂は話し続ける。

円堂「でも…メンバーが揃わなくてさあ…ずっと俺たちで声掛けてんだけど誰も入っ

てくれないんだ……。なあ……。考え直してくれないかな?」

そして豪炎寺は稲妻町の街を見た。

悠「なあ 聞き辛いことを聞くけどなんで辞めてしまったんだ?」

それでも豪炎寺は話さない。

円堂「そうだよ!なんで辞めちまったんだ?話してくれよ?俺、最初見た時、鳥肌立ったんだぜ?サッカー嫌いになったわけじゃないよな?」

悠「おまえ、なんかサッカーのことになると悲しい顔をするけど、サッカー関係で何かあったのか?」

そして豪炎寺はやつと喋った。

豪炎寺「お前達よく喋るな……」

円堂「おれさあ お前とサッカーやりたいんだよ!俺達が組めば最強のチームができるぞ?」

そして豪炎寺は

豪炎寺「もう俺に話しかけるな。」

そう言つて豪炎寺は柵から飛び降り帰ろうとした。しかし俺にはまだ聞きたいことがあった。

悠「じゃあ!なんであの時まこを助けた!?!」

そして豪炎寺はまた悲しそうな顔をし、そして

豪炎寺「しつこいんだよ…お前ら…」

そう言つて去つていった。

やっぱりあれが引つかかつてるんだな…まあしやあないけどな…

そして円堂は夕日を見て、そして俺にこう言つた。

円堂「よし！やるか！」

悠「おう！」

そして俺たちはそれぞれ別の練習をした。円堂はタイヤを背負いそして迫り来るタイヤをキヤツチする練習。そして俺もタイヤを背負い、コーンを置いてドリブル練習をした。

円堂は吹つ飛ばされ、俺は動けなくなるが、2人とも負けじと練習を続けた。そして2人が倒れていると誰かがやって来た。

???「相変わらず無茶苦茶な特訓だな。」

悠 円堂「風丸!?!」

風丸「練習してるんだな…」

悠「まあね…基礎力を上げていかないと…それに俺達には隠し玉を持つているし」

そして風丸は椅子の上にあつたノートを見た。

風丸「これ…読めねえ…お前ら読めるのか？」

円堂「ああ 読めるよ。シユートの止め方が書いてあるんだ。」

風丸「へえ…」

悠「それを書いたのは円堂のおじいさんだとよ。まあ俺の場合、小さい頃に見てたからどうにか読めるようになったよ…。めちやくちや苦労したわ…。」

円堂「じいちゃんは俺が産まれる前に死んじやったけどな…昔雷門サッカー部の監督だったんだってさ。そんな時、作った特訓ノートらしい…帝国学園はスピードもパワーも想像以上さそれをどうにかするにはじいちゃんのノートをマスターするしかないのさ。」

悠「まあ…そうするしかないけど…これ周りから見たら練習に見えないけどなこれ…」

本当にこれ前世でやってる奴なんていないと思うぞこれ。割とガチで。

風丸「お前ら、本当に帝国に勝つつもりなのか？」

円堂「もちろんさ！」

そして風丸は考えて、俺たちの前に手を差し出した。

円堂「え？ なっなに？」

風丸「お前達その気合い乗った！」

俺と円堂は顔を見合い、そして笑顔になり風丸と握手をした。

悠「まじか！サンキューな！風丸！」

そして風丸は木の方に顔を向け、喋った。

風丸「俺はやるぜ？お前らはどうなんだ？」

すると木の影から栗松 穴戸 少林 半田 染岡 壁山が現れた。

おい壁山どうやって隠れた!?　そしてなんか視線を感じていたか原因はそれだったのか…

そして円堂は喜び、みんなの所に行こうとしたが転んでしまう。

栗松 壁山「「キャプテン！」」

栗松「大丈夫でやんすか？」

そして染岡が

染岡「先にお前らがバテるぞ？」

そして円堂は微笑み

円堂「へへっ　大丈夫だっつて」

風丸「こいつら、お前達がここに来る前から見てたんだぞ？」

悠「嘘だろ？なんかそれストーカーみたいで怖いんだけど…」

「「おごー」」

みんながツツコミそして半田が喋る。

半田「お前らが他の運動部に声を掛けてるのを見てたら……」

染岡「なんか……ちよつとな……」

栗松「その特訓もなんか……胸がジーンと熱くなってきたでやんす。」

そして穴戸が言い出す

穴戸「キャプテン！俺も、特訓一緒にやらせてください！」

そして他の奴らがおれもおれもと言ってきた。そして円堂は半泣きになりながら、

円堂「あつたりまえじゃないか、大歓迎だよ！うおー！俺スツゲー嬉しい！やろーぜ

！」

「「「やろーぜー」」」

そして俺は苦笑いしながら言った。

悠「お前らもう少し早くやる気になつてくれよ……」

風丸「だけど、嬉しいんだろ？実際は？」

悠「まあ、そうなんだけどな！」

と俺は微笑んだ。そして俺たちは遅くなるまで特訓をし強くなった。

やつぱりみんなと練習してるとお日さま園のこと思ひ出すな！

くそして試合当日く

部室で円堂が助っ人として入ってくれる人を紹介していた。

円堂「今日の試合、助っ人に入ってくれる松野 空助だ。」

マックス「僕のことはマックスって呼んでいいよ。君たちのキャプテン見てたらなんか退屈しなさそうだと思うてさ。」

染岡「退屈って…遊びじゃないんだぜ？試合は？」

と染岡は不機嫌になりながら言うが、マックスは

マックス「心配いらないよ、サッカーはやったことないけどこう見えて器用なんだよね」

円堂「という事だ！期待しようぜ！」

だけど半田は疑問を感じ質問をした。

半田「だけど、メンバーはまだ10人だぞ？」

悠「何言ってるの？11人居るよ？お前の後ろに居るじゃん？」

???「11人だけど…」

半田「(ソクッ)ごめん…気づかなくて」

円堂「影野も入部したんだっけ！」

そして影野は拗ねて

影野「いいのさあ…俺はもつと存在感を出すためにここに来たんだからね…フツ…フ

フフツ……」

円堂「お前もひどいな……自分で勧誘した癖に忘れやがって

そして俺たちはグラウンドに行き帝国学園を待っている」と帝国学園のバスがやって来た。そして扉が開き最初は二軍共が出てきて隊列になり、そして敬礼をすると次はレッドカーペットが出てきた。そして最後に一軍共が出てきた。

悠「いやー でつかいバスだなーオマケに敬礼なんて自衛隊かよ」

穴戸「悠さん！なに呑気なこと言ってるんですか！」

そして一軍共が話し合っている。

辺見「鬼道さん、なんでこんなチームと試合を？うちのチームのスキルが上がるとは
思いませんけど？」

帝国のメンバーがキャプテンの鬼道に質問をしていた。そして鬼道は

鬼道「面白いものが見られるかもな……」

辺見「面白いもの？」

そして鬼道不気味に微笑みながら

鬼道「まあ 楽しみにしとくことだ。」

そして円堂が相手チームに話しかけに行つた。

円堂「雷門中サッカー部の円堂 守です。練習試合の申し込みありがとうございますごいま

す。」

そして円堂は握手をしようとするが、鬼道は無視し喋った。

鬼道「初めてのグラウンドなんでねえ、ウォーミングアップしてもいいかな？」

うわー感じ悪…なんでこんなに最初は感じ悪くて後々仲良くなるんだろうね？あつこれが超次元だからか！納得！つて、んなわけあるか！

そして俺たちは帝国学園のウォーミングアップを見ていたが、俺達の想像以上の動きをしていた。え？お前は驚かないだろ！つてまあ原作知ってますから。そして俺はのんびりと

悠「いやーやっぱり帝国学園はすごい動きするねー」

染岡「なに呑気な事言ってるだよ！てか何飲んでるんだよ!？」

悠「MAXコーヒーだけど？」

いやーこれ美味しいんだよーまじで神様に感謝だわーうんうん。あつ円堂に忠告するの忘れてた。言わないと

悠「円堂、キャッチする準備した方がいいぞ？」

円堂「え？なんd「いいから早く」わかった！」

そして鬼道は円堂に付けているキャプテンマークをみて指を鳴らし指示を出した。

そして寺門から辺見へパス。辺見から鬼道にパス。そして鬼道が円堂に向かって

シュートをした。

円堂「!？」

円堂は驚いたが問題なく普通にキャッチした。

鬼道「少しはやるようだな、そしてあいつもな」

うわー本当に性格悪いなーおい。：なんか俺を見てる気もするけど：まあいいか
こうして帝国学園との練習試合が始まろうとしていた。

第9話 帝国との練習試合、そして新たなる技！

前回、試合が始まろうとしたと言ったな、あれは嘘だ。だって壁山がトイレ行ってくつて言つて帰つてこないんだもん！みんなめちやくちや探したよトイレとか、トイレとか、トイレとか！やべえトイレしか探してないわみんな！まあ案の定ロッカーの中に隠れていたよ……てかお前体大きいのによく入ったよな？物理法則無視してないか？

まあ少林がどうにかしてくれただけ、ロッカーぶち壊したから後で、先生に怒られるの確定だわ……

え？目金はどうしたかつて？あーあいつは壁山を連れ戻した後に木野が

木野「彼、サッカー部に入ってくれるって」

と笑顔で言つてたがみんな知ってるでしょ？あいつは運動が出来ないって……オマケに今になって来るとか、どんだけ目立ちたいんだよ……俺ら2年生は円堂以外苦笑いだったよ……すると目金は

目金「どうやら、僕が最後の1人になったようだね。」

悠「いや、お前で12人だ」

目金「そ、そんな!?まあこの際どうでもいい、入るにあたつて条件があるだけだ。」

円堂「条件?」

目金「僕さあ、10番のユニホーム以外着たくないんだよねー」

「「えー……」」

と嘆いていたが円堂は

円堂「よし、わかった!それでいいよ!」

と言ったせいでみんな大慌てで

栗松「キャプテン!まじてやすんか!?!」

円堂「マジだ!」

悠「まあ、しようがないしいいんじゃない?それとお前ベンチスタートな。」

目金「えー、そんな!?!」

だつてそうだろ?あとから入ってきたんだから。え?俺の番号つて?あーそれねー
まあみんなと被らないようにしたいから0番にしたようん。なんか、その方がいいなと
思った。うん!語彙力の欠けらも無いね!

やつとメンバーが集まってグラウンドで整列してるが、一方でベンチでは。

???「あのーここで一緒に見てもいいですか?あつ、私、新聞部の音無 春奈です!ど

うぞ、よろしく!」

木野「取材ね!どうぞ!」

音無「やつと一人揃ったんですね、よかった。それで勝つ自信はありますか？」

木野「あるかないかって言われてたらビミョーかな？ 円堂さんと悠くんは秘策があるって言ってたけど…でも勝てるかも…あの2人ならそんな気にさせてくれるんだよね。まだまだ始まったばかりのサッカー部だけだ。」

音無「かつこいいいー！今のコメント使わせてもらいますね！」

そして審判が

審判「これより！帝国学園対雷門中との練習試合をはじめます！両者キャプテン、コメントスを！あつ、鬼道くん！待ちなさい！」

鬼道「必要ない…好きに始めろ」

うわー審判にタメだよ。こいつももうレッドカード出されて退場になれ！そして実況する角馬よ、結構声を出してるね？将棋部なのになんでそんなに声を出せるんだよ？

そしてみんなポジションに着くと色々なことを喋ってた。

染岡「いよいよ、始まるんだな…」

影野「なんか目立った感じがするな。」

栗松「呑気でやんすね。俺なんて緊張してるでやんすよ。」

悠「まあ 緊張することはいいさ。一番ダメなのは緊張していつもの実力が出せないことだろ。」

円堂「さあ!みんな!頑張っていこうぜ!」

そして俺らのフォーメーションは

フォーメーション4-4-2

F W

染岡 悠

M F

穴戸 少林 マックス 半田

D F

風丸 壁山 影野 栗松

G K

円堂

まあ今はこのフォーメーションだろうけど後で変わるだろう?

そして試合のホイッスルがなり、試合が始まった。

染岡「いくぞ」

悠「おう!」

染岡からパスをもらい、俺はマックスにパスを繋いだ。そしてマックスは染岡にロングパスをする。

角馬「雷門!まずは軽快な攻撃で帝国ゴールに向かってる!」

そして 染岡がドリブルしていると、佐久間と寺門の2人がスライディングをしてくるが、染岡は難なく躲した。

染岡「すげーぜ俺、結構やれるんだな!」

悠「まあ、練習の効果が出たんだろ？それより俺にパスをくれ！面白いものを見せてやるよ！」

そう言つて染岡からパスを貰いそして、シュートチャンスになり必殺技を放つた。

悠「星砕き!!」

必殺技を放ちボールがゴールに突き刺さる。源田は雷門に必殺技を出すやつがいな
いと思つていたのか必殺技に反応できなかった。

源田「なに!？」

角馬「ゴール!!なんと!あの帝国からゴールを奪つたのは!背番号0

石田 悠だ!」

風丸「おまえ、必殺技なんて持つていたのか!？」

悠「まあね。そんなくらいやらないと取れないでしょ?アイツら舐めてるし?」

円堂「さすが!悠だぜ!」

俺達が喜びあつていたが帝国は

源田「油断した…:すまない鬼道」

鬼道「あいつは少し厄介だな。だが、他の奴らはそうでもない。あいつをマークし
ろ。」

そして1-0で試合が再開と共に帝国の成神と辺見が俺のことを徹底的にマークし

た。

悠「徹底的に俺をマークして動かさせない気か！」

そして鬼道は

鬼道「見せてやろう…帝国のサッカーを！」

そう言つて寺門にパスし、寺門必殺技を放った。

寺門「百烈ショット!!」

寺門はゴールに向けて打ったが円堂は

円堂「ゴッドハンド!!!」

と難なく止めた

角間「円堂！寺門の強烈なシュートを止めた！」

寺門「なに!?!」

鬼道「まあ 想定内だ。アイツらの体力を潰すぞ…」

そして俺は動けぬまま、他の奴らが痛めつけられそして、円堂もスタミナが切れて必殺技が出せなくなり得点は1―5になりそして…

角馬「ここで前半終了！1点とるも逆転され1―5反撃できるのか!?!」

俺達はベンチに戻るが、俺以外のメンバーは喋る元気すらなかった。

風丸「どうなってるんだあいつら、誰一人も息が上がってないぜ？」

マックス「そりやそうさ、やつら走ってないからね。」

円堂「何言ってるんだ！まだ始まったばかりだぞ！後半もあるじゃないか！」

壁山「後半もやるっすか？やる意味無いっすよ？」

壁山が言い他のみんなもやる気が無くなっていた。

悠「お前ら！あんだだけ練習したのにどうしたんだよ!?!どうする円堂？俺達しかやる気ないぞ？」

円堂「みんな！何言ってるんだ！最後までやるぞ！勝利の女神はどっちがほほ笑むのか最後までやらないとわからないじゃないか！なあ！みんな！」

だがみんな反応せず審判が集合をかけて後半が開始された。

そして早速帝国が本気を見せた。

鬼道「いくぞ。デスゾーン開始。そしてやつを引きずりだせ！」

そう言つて鬼道はボールを上空に上げた。そして佐久間、寺門、洞面が飛び必殺技を放った。

佐久間 寺門 洞面 「デスゾーン!!!」

円堂はすかさず必殺技を出した。

円堂「ゴッドハンド!!!」

だが威力に負けデスゾーンがゴールに突き刺さった。そしてその後からがもう酷

かった。必殺技やファールギリギリのプレイをして味方を痛めつけ、今は1―15そして今立っているのは俺と円堂しかない。

悠「お前ら…どんだけ痛めつけられれば済むんだよ! いい加減にしろ! サッカーならゴールに向かって打てよ!」

鬼道「なら…あのキーパーを潰してあいつを引きずり出す!」

そして円堂の顔を狙いシュートをし、サンドバック状態にしていた。

影野「ひどい!」

マックス「アイツら最初から円堂を潰すのが目的か!」

サンドバックにされてる円堂を見て風丸は

風丸「ふざけるな…こんなのサッカーじゃねえ!」

と身を呈してシュートを防いだ。

円堂「風丸! お前の気持ち受け取ったぜ…絶対…このゴールは守って見せる!」

鬼道「ゴールを守れていないがな…」

そして鬼道は寺門にパスし、寺門は必殺技を出した。

寺門「百烈ショット!!」

悠「円堂! 危ねえ!」

そう言っただけで俺は円堂の前に立ち必殺技を出した。

悠「アイスmakeシールド!!」

俺は新しい必殺技を出したシュートを防ぎボールは外に出た…だが…

少林「足が…」

少林は怪我をし、試合続行ができなくなった。しょうがなく目金と交代しようとしたが…

目金「嫌だア!もうこんなの嫌だア!」

と泣き、ベンチを去りユニホームを脱ぎ逃げていった。

あいつやつぱりクズだ!逃げやがった!

角馬「なんと!雷門!少林が怪我をし目金と交代だが目金は飛び出し雷門イレブンは10人になってしまった!」

鬼道「お前らじや俺達に到底叶わない!」

と言い嘲笑ったが円堂は

円堂「まだ…終わってねえ…まだ…終わってねーぞ!」

円堂が叫ぶと木の方から豪炎寺がユニホームを着て入ってきた。

角馬「おおっと!?!彼はもしや!昨年、1年生ながら強烈なシュートで、一躍ヒーローになった豪炎寺 修也が雷門のユニホームを着て我々の前に登場!」

だが

冬海「待ちなさい！君はサッカー部では「いいですよ、俺たちは」

鬼道が了承し少林との交代が認められた。

円堂「豪炎寺：来てくれたのか!？」

悠「お前、遅すぎねーか？」

そして、俺は土気が上がり試合開始する

鬼道「行け、デスゾーン開始。」

そしてまたデスゾーンが放たれる

佐久間 寺門 洞面「**デスゾーン!!!**」

放たれた瞬間、豪炎寺は一人でゴール前まで走っていく。

悠「円堂！お前気合い入れて止めるよ！あいつのためにも！」

円堂「あいつは、俺が止めるのを信じて走ってるだ！絶対に止める！」

←

そうやって円堂は再びゴッドハンドを繰り出した。

円堂「ゴッドハンド!!!」

先程までのゴッドハンドとは違いパワーが上がってるそして止めた！

角馬「円堂！ついにデスゾーンを止めた！」

そして円堂は豪炎寺へのロングパスをし、豪炎寺は必殺技を放った。

豪炎寺「ファイアトルネード!!!」

そして源田はスピードに反応出来ずゴールネットに突き刺さった。

角馬「ゴール! ついに! 雷門が追加点! 帝国から1点を取り返した!」

そして帝国が用が済み撤退した。

審判「帝国学園から試合放棄をし、たった今試合終了!」

鬼道「思わぬ収穫があつたな、円堂 守と石田 悠か…覚えとこう…」

そう言つて帝国学園が去つていった。

木野「ねえ! これ記事に書いてよね!」

音無「はい!」

そして俺はあの帝国学園に勝つたが…

円堂「豪炎寺! これから一緒にやろうぜ!」

豪炎寺「今回限りだ。」

そう言つて去つていった。

円堂「ありがとな!」

壁山「キャプテン、止めないんすか?」

悠「何言つてるんだ? 壁山? あいつはあーゆう奴なんだよ。」

円堂「よーし! これからまた頑張るぞ!」

そうやって俺はまた練習に励むのであった……

祝！第10話 蒼きドラゴンの誕生！

帝国学園との練習試合の次の日、俺たちは、帝国学園の試合を振り返るためミーティングをしていた。

円堂「帝国学園との試合で問題点があった。そして「問題点も何も、体力なさすぎ」マックスが正論を言ったらみんな凹んだ。えーマックスが言っていたことは正論でござるよ？お前誰だよ…」

マックス「あつ、ごめん。今の凹んだ？」

風丸「円堂…話を続けてくれ…」

円堂「体力作りも大事なんだけど、こんなフォーメーションを考えたんだ。まあ、じいちゃんのノートがベースなんだけどさあ。」

そう言つてホワイトボードにフォーメーションを書いた。

だが1人反論した奴がいた。

目金「えー僕、またベンチなんですか？」

悠「いや…お前試合抜け出したのに、何サラツと戻つてきてるの？」

目金「戦略的撤退と言つてほしいね。」

みんなは目金の発言にズッコケた。そして宍戸が、

宍戸「あのーキャプテン、この間のように豪炎寺さん呼べないんですか?」

目金「そうだよねえ、実際ゴールを入れたのは豪炎寺くんと悠くんのシュートだったんだからね。」

壁山「そうつすよねえ、今の俺達じゃなれないつすよ…。」

おいおいみんなそう言うなよ、と思っていたら染岡が

染岡「あんなのは邪道だ!俺が本当のサッカーを見せてやる!」

悠「いやいや!俺の目の前で邪道だなんてよく言えるね!?!ひどい!」

染岡「うるせえ!第一、豪炎寺はもうやらねーんだろ?」

円堂「それはわからないけど…」

染岡「円堂だつてアイツに頼りすぎだ。」

悠「まあ、それには賛成かな?みんな他人任せになつてちや、昨日の試合の二の舞いだよ?」

染岡「悠の言う通りだ!俺達にだつて出来るさ!」

ギスギスしだした空気になってきてたが、木野が入ってきた。

木野「みんなーお客さんだよ!どつ、どうしたの?」

円堂「いや…なんでもない。」

良かった：これ以上ギスギスするとやばい事になるよ：お客さんありがとう！
しかし願いはむなく、来たのは事態をさらに酷くするお客様だった。

夏末「・・・臭いわ」

おいー！なんで生徒会長連れてきた！悪化するに決まってるだろ！

染岡「なんでこんな奴連れてきたんだよ！」

木野「話があるって。」

おいおい染岡さんよー、木野が困った顔してるじゃねーかよ。やだあ染岡こわーい。

俺は一体なんのキャラになりたいんだ？これ？

そして、夏末は言葉を放った。

夏末「帝国学園との練習試合、廃部だけは逃れたわね。」

悠「そりやーどーも。で？要件は何？」

夏末「次の練習試合の相手を決めておいたわ。」

「「「えー!?!」」」

みんなは驚き、そして喜んだ。

栗松「すごいでやんすね！もう次の試合が決まるなんて！」

半田「やったな、円堂。」

円堂「ああ！夢みたいだよ！また試合ができるなんて！」

目金「次こそは僕が出て活躍するよ。」

影野「俺も、次こそ目立つよ。」

そう次々と意気込んでいると、

夏末「話を聞くの?聞かないの?」

うわー怒っちゃったよーこわー

円堂「ああ、すまない!で、どこの学校なんだ?」

夏末「尾刈斗中、試合は一週間後よ。」

半田「尾刈斗中?」

悠「お前達…そんなものもしらないのかよ…同じ地区だぞ?」

なんでみんな!地区の中学校とか全国の中学校調べないの!?!イミワカンナイ!

夏末「もちろん、ただ試合をやるだけではないわ。今度こそ負けたら直ちにサッカー

部は廃部。ただし勝利すればフットボールフロンティアの参加を認めましょう。」

「「「えっ!」」」

夏末「せいぜい頑張る事ね。」

そう言い部室から出ていった。

そして俺たちは喜び、尾刈斗との試合に備え、河川敷で練習をしたが、練習中、染岡のラフプレーが目立ち練習がストップした。

そして音無が河川敷に来て、木野が次の練習相手を教えると、ビビってすぐさま部員に噂を教えた。

いやビビりすぎだろ？全部○○なんだから？え？○○は○○だろ？何言ってるんだ？お前ら？

そして染岡が

染岡「それがなんだ！豪炎寺なんていなくなつて俺がいる！次は悠の出番じゃなくて俺の出番だ！」

半田「おお！その意気だ！染岡もあの二人の事ばかり言つたらそりや怒るって…」
そして、噂を怖がりしつつも練習を再開し、そして次の日になった。

流星に休みがないと怪我するので今日は週に一回の休みだ。

俺と円堂が2人で歩いてると、道路の反対側に豪炎寺がいた。

そして、何となく豪炎寺の後をついて行くと、そこは病院だった。

悠「此処は病院だな？」

円堂「あいつ、怪我してるのか？おい、後を追うぞ。」

さーて抜き足差し足忍び足をして豪炎寺の後をついて行つたが途中で見失い、そして目の前の扉が開くと豪炎寺がいた。

豪炎寺「お前ら…何しに来た…」

悠「たまたまお前を見たから後を付いてたら病院だったってこと。

まあ後を付けてごめんな?」

円堂「いやあ、サッカー辞めたのも怪我かと思って、けどお前が1度って言ったのも分かってる、だけど…俺達誘いに来たわけじゃないんだ。少し心配で…なんと言うか…ゴメン!」

豪炎寺「全く、お前らには呆れるよ…入れよ。」

そして俺と円堂は入ると1人の少女が眠っていた。

豪炎寺「俺の妹で、夕香って言うんだ…もうずっと眠り続けている。話すよ、お前らに。でないと帰らないだろ?」

そして豪炎寺は夕香ちゃんが眠り続けているわけを話した。去年のフットボールフロンティア決勝の日に、トラックに轢かれてから眠り続けているという。そして事故の話聞いた豪炎寺は、試合前にもかかわらず会場を抜けて病院に行った。そして俺がサッカーをしなければこんな事にならなかつたと後悔していた。

豪炎寺「なぜか…なんだかな、お前達を見ていたら自然と体が動いてた…」

そして円堂はみんなには内緒にすると行って帰ったが、俺は病室に残っていた。

悠「豪炎寺、お前本当にこれがいいと思ってるのか?」

豪炎寺「何が言いたい…」

悠「本当にこれが最善だと思ってるのか？思っていたら大バカだよ！お前の妹は：お前のサツカーをしている所を見るのが好きなんだよ！どうしてそれが分からないんだよ！普通に考えたら分かるだろ！」

豪炎寺「お前に何がわかるんだ！今知った癖に！」

悠「す、すまん：なんか説教して悪かったな：次の練習試合決まったんだ：良かったら見てくれないか？じゃあな：」

豪炎寺「あ、ああ：」

そして俺も帰って行った。本当にあいつは最善の方法を見失ってるよ…。

そして次の日部屋に來ると、音無がサツカー部に入りマネージャーになった。

いやお前、喋りすぎだろ音無じゃないよやかま「なんか言いました？」「いいえなにも！」やべえよこいつエスパーだよ心の声聞こえてるよ！

そして俺達はまた河川敷のグラウンドで練習していた。そして染岡がまた一人でシュートを打っていた。

染岡「くそ！なんでできないんだよ！豪炎寺も悠も必殺技を持っているのに！」

悠「染岡！お前何言ってるんだよ、周りに気にしすぎだアホ。お前はお前だろ？自分なりのサツカーでいけばいけるって、それに俺達がいるだろ？円堂？」

円堂「ああ！そうだぞ！俺達がいるぞ！染岡！」

染岡「俺なりの、サッカー…そうか!ありがとう悠!円堂!そうだよな!俺は俺なりのサッカーがある!」

そして染岡の必殺技練習が始まった。

一方その頃橋の上で見ている豪炎寺に1台の車が止まり窓が開いた。

夏末「こんにちは、雷門 夏末と言います。」

豪炎寺「どうも…」

夏末「この道あなたの通学路だったかしら?失礼だけど、あなた事は調べさせて貰ったわ。妹さんのこともね。」

豪炎寺「!?!」

豪炎寺は驚きそして、去ろうとするが…

夏末「貴方!このままでいいの!?!あの諦めの悪い連中とプレイしたい。だからこの道を通ってる。」

豪炎寺「ほつといてくれ。」

夏末「サッカーを辞めることが妹さんの償いになるというの!?!そんなの、勘違いも甚だしいわね。貴方に1番サッカーをして欲しいのは、一体誰なのかしら?」

豪炎寺「!?!夕香…」

夏末「行ってちょうだい」

そして夏未は窓を閉じて去っていった。

そして染岡が必殺技の練習中

染岡「(負けないぜ、豪炎寺や悠には、絶対負けないぜ!)」

そしてついに染岡は

染岡「くらえ! ドラゴンクラッシュ!!!」

そして円堂は反応出来ずゴールに突き刺さった。

そして円堂は

円堂「染岡! ついにやったな! すげーシュートだったな!」

染岡「これだ…これが俺のシュートだ!」

悠「あーやべえなこれ、これじゃあ染岡に抜かされるかもな? だけど負けないよ?」

そして染岡が必殺技を覚え祝福してると豪炎寺が現れた。

円堂「豪炎寺…」

穴戸「ああ!」

染岡「なに!?!」

豪炎寺「円堂、俺やるよ!」

悠「豪炎寺、ついに吹っ切れたんだな!」

豪炎寺「ああ、お前のおかげだよ、ありがとう。」

そして豪炎寺が新たにサッカー部に入った。

第11話 尾刈斗中の呪い

豪炎寺がサッカー部に入り、そして尾刈斗中との練習試合当日、俺達はグラウンドでアップをしていると夏未がベンチに来た。

円堂「よう、本当にこの試合で勝つたら、学校でフットボールフロンティアの参加料払ってくれるんだよね？」

夏未「ええ、約束通りに、ですが負けたら廃部ということもお忘れなく」
そう言つて夏未は去つていった。

悠「負けるわけじゃないでしょ？ 俺らが？ なあ？ 円堂？」

円堂「そうだな！」

と話していたら尾刈斗中の奴らがグラウンドに現れた。

影野「不気味だ……」

半田「お前が言うなつて……」

壁山「お、俺トイレ行つてきてもいいですか？」

円堂「またかよ、」

壁山がまたトイレに行きたいと言つて、みんなズッコケた。

その後俺達は整列して拍手した。そして尾刈斗中の監督は、帝国学園からゴールを決めた俺と豪炎寺にしか興味がなく、他の奴らはどうでもいいと言ってきた。

うわーこの人大人なのに最低限のマナーも知らないのか？終わってるなー、オマケに染岡激おこだぞ？

染岡「豪炎寺や悠だけじゃないってところ見せてやる！」

ほらー怒ってるじゃないですかーやだー

そして今回の俺たちのフォーメーションはこうだ

フォーメーション 4―4―2

F W 染岡 豪炎寺

M F 宍戸 マックス 悠 半田

D F 風丸 壁山 影野 栗松

G K 円堂

このようなフォーメーションになっている。

今回俺はMFだ、え？FWじゃないのって？いや俺は点取り屋じゃなくてもいいから、エンジョイ勢だから。

角馬「さて、今回はどのような展開になるか見ものです！そして、今キックオフです

!!」

円堂「さあ！みんな！気合い入れていこうぜ！」

「「「おうー」」」

そして尾刈斗中のボールでキックオフだ。

尾刈斗中の月村が1人で駆け抜け抜けシュートチャンスだ。そして：

月村「フアントムシュート!!!」

シュートを放ったが円堂は

円堂「ゴツドハンド!!!」

と難なくキャッチした。

そして俺達上がり染岡のシュートチャンスになり必殺技を放つ

染岡「ドラゴンクラッシュ!!!」

染岡のドラゴンクラッシュが決まり先制点を挙げた。

角馬「ゴール！染岡のシュート炸裂！」

おー相手の監督さん焦ってるーぎまー え？性格が悪い？いつもだよ！

円堂「やったな！染岡！俺達为先取点取ったんだぜ!?!」

染岡「ああ！」

そしてベンチでは、

音無「やった！すごいシュートでしたね！」

木野「ドラゴンクラッシュって！」

つと手を繋いで喜んでた。なんだろう？百合かな？と思っただけど気のせいだ気のせい。

だが、尾刈斗中はそんなことを気にせず試合を再開するそして、相手の監督の口調がかわり、呪文を唱え、相手のキャプテンの幽谷はゴールに向かってドリブルしている。

穴戸「なんだろう？あれ？」

栗松「呪文かなにかでやんすかね？」

半田「くるぞ！」

幽谷率いる5人は一斉にグループとなって走っている。そして見る度に立ち位置が変わっていく。

マックス「なんだこれ？」

風丸「くるぞ！ 栗松は9番、マックスは11番のマークに着くんのだ！」

そして栗松、マックスはマークに着くが、

風丸「なにやってるんだ、お前ら！」

するとマックスは半田にマークしており、栗松は穴戸をマークしていた。

そして幽谷はさらに技を出した。

幽谷「いくぞ、ゴーストロック!!!」

と叫んだ瞬間

影野「足が…」

壁山「動かないっす！」

何故かみんな足が動かなくなりガラ空きのゴールにシュートされ同点になった。

やっと動けるようになったけど…もうこれネタバレして普通に勝つか、どうせ勝つし！なんかたまにはやりすぎることしたいよね！おい、今俺のことサイコパスと言ったやつ出てこい怒らないから。

そして、試合が開始されるが…

幽谷「どうしたって無駄だ！ゴーストロック!!!」

俺達はまた動けなくなり、ボールをまた取られドリブルで突破される。

あーこれ相手調子に乗っているな うん、よし心折ってやろう！

そして俺は、

悠「あつ！なんか知らないけど足が動けるようになった！…あつゴメン！今のなし！」

「「「なしにできるか！」」」

と壮大に突っ込まれた。えーだつてーねー何も知らずに動いたら怖いでしょ？普通に仕組みばらしたら、チートでしょ？ピーターでしょ？ ごめんピーターは違うわ、

やっぱりキリトかなー？彼女いるし？・・・ごめんなさい！嘘吐きました！彼女なんて今まで1回も出来たことありません！

円堂「動けるんだな!?!よし行け！悠！」

そして俺はボールを奪い1人で前線を上げシュートチャンスになる。

あー確か相手のキーパーの手を見ると弱くなるから気をつけないとな。

悠「よし！いくぞ！星砕き!!」

相手の手を見ずシュートした俺はそのままゴールに突き刺さった。

角馬「ゴール！尾刈斗中のゴーストロックを打ち破り、勝ち越し点をとった！」

半田「悠！どうして動けるようになったんだ？」

悠「んーなんか相手がゴーストロックを発動する時、相手の監督がなんか言ってたからそれが仕組みだと思ってなんとなく相手が言っていることの逆の言葉を言ったら、動けるようになった。いやー偶然ってこわいね！」

風丸「相変わらず呑気だな…」

そして俺達は難なく尾刈斗中に勝った。え？ドラゴントルネードはだって？普通に
出たよ？なんせ俺が

悠「染岡、お前はまだまだ豪炎寺や俺に焦りを持っている。俺達はチームだから力を合わせないとだめだろ？」

染岡「力を…合わせる…」

そしたら染岡が

染岡「いくぞ、豪炎寺！ドラゴンクラッシュ!!!」

そして豪炎寺は飛び

豪炎寺「ファイアトルネード!!!」

を繰り出して、ドラゴントルネードの完成だ、うん！3分クッキングみたいだわこれ

：

円堂「やったな！これでフットボールフロンティアに出れるぞ！」

それで俺達は難なくフットボールフロンティアに出れることになった。

本当にやりすぎちやいまちたテヘペロ。：。＊。・。

第12話 新たなる部員!そしてを生き出せ!

俺が原作崩壊させた尾刈斗中との練習試合が終わり、試合に勝った俺達はフットボールフロンティアに出場することができたことになった。

てか 予選の抽選ネット配信されてるのね、知らなかったわーてか抽選の時にいたバニーガールなぜ被り物をしてるんだろう? 誰得だ?

と登校しながら考えてたが、朝から円堂はフットボールフロンティアだ!と言いまくってた、正直しつこすぎるわ! 豪炎寺もこんな感じだったんだろうなー ものすごく他人事だけどね!

そして部活の時間になり俺達は部室にいた

円堂 「みんな! わかってるな!」

「「「「おう!」」」」

円堂 「とうとう、フットボールフロンティアが始まるんだ!」

「「「「おう!!!」」」」

風丸 「で、相手はどこなんだ?」

円堂「相手は……」

円堂はものすごく真剣な顔になって言った

円堂「知らない！」

そしてみんなズッコケた。

悠「なに真剣な顔で知らないんだよ！調べるよ！キャプテンだろ！バカ！」

と漫才みたいな事をしてると冬海先生が来た。

冬海「野生中ですよ、野生中は確か」

音無「昨年の決勝で帝国と戦っています」

円堂「すつげえ！そんなチームと戦えるのか？」

冬海「初戦で大差で敗退、なんて事には勘弁して欲しいですね。あーそれから……」

土門「ちーす！俺土門 飛鳥 一応ディフェンダー希望ね」

冬海「君も物好きですね、こんな弱小クラブに入部したいだなんてね。」

そう言つて冬海先生は部室をあとにした。すると

木野「土門くん。」

土門「あれ？秋じゃない！お前雷門中だったの!？」

悠「知り合いか？」

木野「うん、昔ね」

円堂「とにかく、歓迎するよー!フットボールフロンティアに向けて一緒に頑張ろう!」

そう言いながら円堂は土門の手を握って腕を振ったが振りすぎだろ、ほらー土門困ってるじゃん:

すると困りながらも土門は

土門「相手野生中だろ?大丈夫かな?」

染岡「なんだよ、新入りが偉そうに」

うわー、染岡パイセン新入りいじりだー まーたしてるよー前は豪炎寺にしてたのにーと思っていたら

土門「前の中学で戦ったことあるからねー、瞬発力、機動力とも大会屈指だ。特に高さ勝負にはめっぼう強いのが特徴だ。」

と野生中の強さを説明した。そして豪炎寺も野生中と試合した経験があり今のままじゃきついいと言ってきた。

すると円堂は

円堂「新!必殺技だー!新しい必殺技を生み出すんだよ!空を制するんだ!」

そして空中戦の練習するために消防車を使って練習する。

てかなんで消防車あるんだよ!普通火事じゃないと呼べないぞ!

あつわかった！これが超次元だ！とか言うオチかな？何かあつたら超次元！ここへストに出るよ！

そして古株さんが来てイナズマイレブンの話をしてきた。そしてまたチームの絆が深まった。

そして次の日、俺達は新たな必殺技をするが、なんか：パツとしないって言うかハッキリ言う！ふざけ過ぎた！これ！俺の星砕きとかどんだけ真面目に考えて練習したと思ってる！

とこのようにグダグダになってしまった。そして部活が終わり俺と円堂、豪炎寺、風丸は雷雷軒で会議をしていた。

風丸「野生中相手に新必殺技もなしにどうやって戦うんだよ？」

円堂「俺は皆を信じる、例え新必殺技がなくてもやっていけるよ、思い出せ、俺達イナズマイレブンになるんだぜ？伸びるぞラーメン。」

豪炎寺「イナズマイレブンか：」

円堂「jeeちゃん達どんな必殺技を持ってたんだろう：知りたいな」

悠「もしかしたら、結構近くにあつたりしてな」

雷雷軒店長「イナズマイレブンの秘伝書がある：」

風丸「へー秘伝書なんてあるんだ」

円堂「なーに書いてあるんだろう」

悠「そりゃーお前、秘伝書と言ったら必殺技とかパワーアップとかする方法じゃないのの?」

なに言ってるだよ、まじで秘伝書と言ったら…ってえ?秘伝書?

悠 円堂 風丸「「えー!?秘伝書だつて!」」

てか俺ら見事にハモったわ、てかなんだろうこの古典的な驚き方:

円堂「ノートじゃないの!?凄技ノートなら俺ん家にあるけど?」

雷雷軒店長「ノートは秘伝書の一部に過ぎない。」

と言つてこつちを見ていた。すると

雷雷軒店長「お前円堂 大介の孫か!」

円堂「うん!」

雷雷軒店長「そーか!大介さんの孫か!あつはつはつ!、そうか大介さんの孫か!」
と言つて円堂におたまを向けた。

円堂「イッテ、なにするんだ!」

そして店長は、シリアスな感じで言ってきた。

雷雷軒店長「秘伝書はお前達に災いをもたらすかもしれないぞ?それでも見たいか!」

円堂「ああ!」

そして俺達は秘伝書の場所を教えて貰い後日探しに行くのであった。
そして次の日

俺達は秘伝書を取りに行くのがその場所が：

壁山「本当にここにあるんすか？」

風丸「ああ、雷雷軒のおじさんは理事長室の金庫の中だつて。」

悠「おい！これ：バレたらタダじゃ済まされねーつて、あの生徒会長にお願いして貰おうぜ？」

円堂「何言ってるんだよ!?よし：いくぞ！静かにな」

えーまじでお願いした方が良いんだけどなーこれマジで：

そして入って金庫を開けようとするが

円堂「よし：任せろ：」

と自信満々で開けようとするが開かない

風丸「何が任せろだよ！」

染岡「早く開けろよ！見つかったらどうするんだよ！」

悠「あのーお前から開けてる途中で悪いが：もう見つかつてるぞ？」

「「「「えつ：：「「「」

そした入口の方を見ると夏未がいた。

円堂「えっと、あのー」

風丸「ほら、練習だよ!」

円堂「そつ、そーだよ!練習なんだよ、敵に見つからないようにする練習なんだ!」

と意味無い言い訳をする円堂と風丸を見て、夏末がため息をつきながら

夏末「あんた達が探してるのつて、これでしょ?」

そう言つて秘伝書を掲げた。

円堂「じーちゃんの秘伝書!」

と円堂は生き良いよく秘伝書を取り読んだ。

悠「いやーゴメンね、俺は頼もうとしたけど他の奴らは嫌だつて言つててさあ…」

夏末「貴方も苦労してるのね…」

悠「まあ…もう慣れたよ…」

俺の目が白くなった…ふええんつらたんだよー

やべえなこれ気持ち悪い自分でやつといて

そして俺達は秘伝書を手にして部室で読んでた。

染岡「暗号が書かれてるのか?」

壁山「外国の文字つすかね?」

風丸「いや、おつそろしく字が汚いんだ。」

すると俺と円堂以外は落ち込み

少林「汚いんですか…」

風丸「多分…」

壁山「誰も読めないじゃ…」

染岡「それ使えねーよ」

そして

風丸 染岡 「円堂!!」

円堂「すげー！ゴッドハンドの極意だつて！」

「『読めるのかよ!』」

悠「あーそっかーみんな知らないんだつたー 円堂は昔っから爺さんのノート読んでるから大丈夫だよ。それと俺も小学生の時に見せてもらって気合で覚えた」

そして俺と円堂は秘伝書を読み、今の状況を打破する必殺技を探していると。

悠「円堂これじゃないのか？」

円堂「そうだな！相手の高さには勝つにはこれだ！イナズマ落とし」

少林「イナズマ落とし」

壁山「かつこいっす！」

そして円堂が内容を読んだ

円堂「1人がビヨーンと飛ぶ、そしてもう1人の上でバーンとなってクルット回ってズバーン、これぞイナズマ落とし極意」

そしてみんなはズッコケた。

だってこれ擬音ばっかじゃねーか!

風丸「円堂：お前の爺さん国語の成績よかったのか?」

円堂「さあ? サッカー一筋の人だったらいいから:」

染岡「あんなに騒いでビヨーンやズバーンか: もうちよつと書いてくれよ:」

円堂「でもさ、じいちゃん嘘はつかないよ、ここには本当にイナズマ落としの極意が書かれてるんだ。あとは特訓さえすれば良いんだよ!」

と円堂は燃えていた。燃え尽きて真っ白にならないよな?

そして必殺技の話は終わり俺達は鉄塔広場で特訓をしていた

染岡「本日のメインイベントはこれ、敵の凄技を受ける特訓だ。」

そして俺らは逃げ残った穴戸だけが最初の餌食になった。

うわあー、飛んでるー どこぞのETを思い出したわ: ホウセイマイフレンド。あれ? なんか違うか? まあいいやー

そして円堂と豪炎寺は、話し合い最終的に豪炎寺と壁山の連携技になることになった

:

過酷な練習だけど俺達はイナズマ落としを編み出すのであった。

第13話 弱虫な巨人の成長

あれからイナズマ落としの練習をしているが、壁山は極度の高所恐怖症で80cmでギリギリ大丈夫くらいだ。

いや壁山どんだけ弱虫なんだよ：短所ありすぎだろ：まあ成長するんですけどね！
最終的にイナズマ落としが出来ず野生中との試合になるのだが：

悠「ここって本当に東京？富〇〇フアリパークじゃないよね？」

半田「なんだよ、富士サフアリパ〇〇って：」

あつ、君たちは富士サ〇〇リパークをしらないフレンズなんだね！

って色々混ざりすぎだわこれ：

東京と思えないほどのジャングルの中に野生中が存在した、そしてみんなジャングルに驚いてると夏未が乗っていた車を野生中のサッカー部が遊んでいた。

おいおいこれ完璧に壊してるぞこいつら：：ピ〇〇たけしかよ：あれはテレビだから許されてるんだよ？弁償って言葉しないのかな？

そして、試合の前になると観客が見に来ている。

円堂「観客がいっぱいだ！本当にフットボールフロンティアが始まるんだな、燃えて

きた！応援に来てる人の為にも頑張ろうぜ！」

風丸「つて、全部野生中だろ？」

染岡「俺達弱小サッカー部に応援に来るわけ」

円堂「いるんだよ！ほら！」

円堂が指をさした方向に3人が応援している。

うわー、壁山の弟どんだけ壁山にプレッシャー与えるんだよ死ぬぞあいつ…

そんなことで、試合が開始されようとする。

フォーメーションは

フォーメーション 4―4―2

F W 染岡 豪炎寺

M F 少林 マックス 悠 半田

D F 風丸 壁山 影野 栗松

G K 円堂

今回もMFだ、まあ今回は出血大サーブスであれだそう！うん！だけどイナズマ落としを打ってからだだけだね！ そうしないとイナズマ落としじゃ意味ないじゃん！つて言われるわ…

そして、雷門のボールで試合開始になり、早速豪炎寺がファイヤアトルネードをしよ

うとするが、野生中のキャプテン、ニワトリが豪炎寺よりも高く飛びボールを奪い、カウスターでボールを貰ったワシが必殺技を放つ

ワシ「コンドルダイブ！」

そして円堂は止めようとしたが横からゴリラが必殺技を放ちコースを変える

ゴリラ「ターザンキック！」

急にシュートコースが変わるが円堂は

円堂「熱血パンチ！」

角馬「円堂、熱血パンチで辛うじて防いだ！しかし恐るべき野生中の個人技、雷門中
反応できない。」

そして雷門の攻撃になり、豪炎寺がマークされて、染岡がドラゴンクラッシュを放とうとしたがライオンに吹っ飛ばされた。

いや どう見てもこれ、レッドだな！間違はなく！前世は絶対にアウト！だけど、あ
ら不思議！ここは超次元だからレッドになりません！

そして染岡はケガをしてしまい土門と交代だ。壁山は染岡の所に、土門は壁山の所に
入った。

そして試合が再開し、カメレオンがドリブルで進んでいると土門が立ちはだかり、そ
して必殺技を出した。

土門「キラースライド！」

そして土門はボールを空中に出し豪炎寺と壁山のイナズマ落としをしようとするが、壁山はまたビビってしまってイナズマ落としが決まらない。そしてボールが奪われ最終的にシュートされるが円堂が守り、またイナズマ落としを出そうとするが壁山がビビってイナズマ落としのループになった。

へび「スネークショット！」

円堂「熱血パンチ！」

円堂がまた止めた、そして

角馬「ここで、前半終了！両チーム無得点！試合をコントロールしているのは野生中！疲労困憊してる雷門中は果たして反撃の手段があるのか!?!」

みんなベンチに座り休憩していると

円堂「やったな！みんな！」

風丸「円堂…」

染岡「何言ってるんだ、コテンパンじゃないか。」

円堂「でも、同点だぜ!?!あんな凄い連中相手にだ、後半も俺は絶対ゴールを割らせない、そして2人のイナズマ落としで点を取って勝つんだ！」

壁山「俺をDFに戻してください…」

円堂「壁山…」

壁山「ダメなら交代してください…俺にはイナズマ落としが出来ないっす…これ以上ボールを上げてもらって…」

円堂「いいや、DFには戻させないし、交代もさせない！俺はお前と豪炎寺にボールを出し続ける！高いのが怖いって言いながらお前はあんなに頑張ってたじゃないか、精一杯やった努力は無駄にはならないよ！きつと身を結ぶさ！だから、何度でもお前の所にボールをあげ続ける！いいな！」

壁山「でも、俺は…」

悠「まあ、自信がないのは分かるが出来なくても後ろには円堂がいるんだ、見ろよ？あいつの手、手が真っ赤になっても止め続けてる。なぜ止め続けてると思う？それはお前達ならできると信じてるからさ。だから俺はアイツを信じてプレーに集中できる。」

壁山「悠さん…」

そして後半が開始され、野生中がシュートをして円堂がまた止め壁山にパスを出す

円堂「いっけー！壁山!!」

そして壁山は勇気を振り絞ってイナズマ落としを放つ

壁山「これが俺のイナズマ落とし!!」

壁山が仰向けになり、豪炎寺は仰向けになった壁山を踏み台にしてさらに飛び、イナズマ落としを放った。そして：

角馬「ゴール！遂に野生中のゴールをこじ開けた！豪炎寺と壁山による新しい必殺技だあ！雷門中1点先制！」

豪炎寺と壁山のイナズマ落としが見事にゴールに突き刺ささった。

豪炎寺「まさか腹とはな、誰にも真似できないお前だけのイナズマ落とし。」

円堂「やったな！壁山！」

壁山「はいっす！」

悠「スゲーなイナズマ落とし！じゃあ俺も出血大サービスであれしますかね？円堂！あれやるからな！」

円堂「おお！本当か!？」

風丸「あれってなんだよ？」

悠「それは見てからのお楽しみだぜ？」

なんか俺キメすぎやろ？キモいな俺：

そして試合が再開し、俺はスライディングしてボールを奪い、一人で駆け上がりシュートチャンスになる。

悠「さーて！良いものを見せてもらったし！こつちもいいものを見せてやるか！」

そして俺は叫び化身を呼び出す!

悠『来い! 宇宙の覇者 コスモ
!!!!!!』

俺はコスモを出し必殺技を放つ

悠『コスモ・ブレイク!!!』

シユートは凄まじく相手のGKは吹き飛びゴールに突き刺す

角馬「ゴール! 雷門追加点! 悠の背中から謎のものが飛び出し、そして新たなる必殺技がゴールに突き刺さった!」

半田「悠!」

悠「ん? どうした?」

風丸「どうしたもこうしたも、なんだよあれ!」

栗松「なんか背中からドバーツと出てきたでやんす!」

悠「あーあれ? 俺の切り札、まああれを出すともものすごく体力を使うから諸刃の剣だよ。あと、円堂も同じことできるぞ?」

「「「「えー!?!」」」」

まあ、原作ブレイクなんですけどね!

そして笛が鳴り試合終了。2-0で俺達が勝った。

そして翌日、俺達は部室に入ろうとして扉を開けると…

円堂「ええ!?!お前何で此処に!?!」

そこには、生徒会長の夏未がいた。そして：

夏未「今日から私、雷門　夏未はサッカー部のマネージャーになりましたので、よろしく。」

「「「「えー!」」」」

こうして、夏未はマネージャーになった。

わーおこれでマネージャーは全員揃ったぜ! やったね! だけど本当に生徒会長は大丈夫なのか? 多分この人箱入り娘な感じで世間をあまり知らない感じするけど、まあ、なんとかなるさ!(天馬風) え? ふざけ過ぎって? フツフツフ…いつからこれは、ふざけると錯覚していた? これが通常運転なんだよ!

第14話 モノマネ大好きな奴が来る!

野生中に勝った次の日から俺達は河川敷で練習してるがなんか人がいっぱい見てる。

半田「なんか、最近ギヤラリーが増えてないか?」

栗松「そうでやんすね」

円堂「どうしたどうした?練習を止めたりして」

風丸「もしかして、ついにできたのか?」

円堂「なにが?」

風丸「俺達のファンだよ」

風丸が言うのとみんな驚き嬉しがっていた、てか円堂に至っては泣いてるよ…穴戸よ…

カメラがこっちに向けてるだけで驚くな…え?カメラ?それはやべえな…

悠「おい…これもしかしてファンの中n うあー!!!」

俺が喋ってる途中で車がグラウンドに突っ込んできた、あぶねー!俺を殺すつもりか! 転生してまた転生させるつもりか!?

俺が驚いていると車の中から夏未がでてきた。そしていいなり…

夏末「必殺技の練習は禁止します。」

円堂「いきなり何を言い出すんだよ！必殺技なしでフットボールフロンティアで勝ち進めるのかよ!？」

悠「まあまあ落ち着け円堂、夏末の言っていることを詳しく言うと、橋の上で見ている奴らの中に他の中学の奴らが偵察に来てるから手の内を明かさないと必殺技の練習を禁止しろと言っているわけ！」

「「偵察ー！」「」

夏末「その通り、全く無名のチームが帝国学園に勝ち、そのまま連勝を続けているのよ？当然のことだわ。」

悠「だから俺達は必殺技の練習をするのは駄目って訳、まあ強豪になると通る道だし……まあ必殺技以外にもやることあるさーなんくるないさー」

豪炎寺「お前は本当にブレないな……」

あらやダー豪炎寺にツッコまれたーそんなに酷かったか？これ？

すると円堂は

円堂「だったら！誰にも見られない練習場で練習しよう！必殺技のさあ！」

そして俺達はこのあとも練習をして次の日も河川敷で練習をする事になり、今は準備運動をしている。

風丸「連中また増えてるぞ?」

栗松「今日も必殺技の練習は無理でやんすね?」

円堂「必殺技がサッカーだけじゃないさ、肩の力抜いてみっちり基本練習だ!」

円堂「!お前押しすぎ!壁山折れる!折れるから! ってか本当に増えてるなーてかこんな所に陣取っていると警察来ると思うけどな?」

すると急に謎の車が止った、そしてレーダーなのなんだの変なものを取り付いている

：

円堂「なんだあれ?」

音無「次の対戦相手です」

円堂「次の対戦相手?」

悠「また覚えてないの?あいつらは御影専農と言ってトゲトゲ頭のやつがキャプテンのキーパーであつちが御影専農のエースストライカーだよ」

染岡「徹底的に観察してやがる、やな奴だな」

豪炎寺「気にせずいこう!シユート練習だ」

そして俺達は集中してシユート練習をするが

円堂「よーし!次影野! えっ!?!」

おいおい!まじかよ!?!あいつら普通にグラウンドに入ってきたぞ?

円堂「あいつら、入ってきやがった！タイム！みんなちよつとストップ」

円堂は休憩を指示して御影専農の奴らの所に行く、まあ俺も行くけどね！

円堂「御影専農のキャプテンだよな？練習中にグラウンドに入らないでくれよ！」

悠「あのねー偵察はまだ分かるけど、妨害はダメじゃない普通に？」

杉森「なぜ必殺技の練習を隠す」

改「今更隠しても無駄だ、既に君たちの能力を解析している、ひとつを覗いて」

杉森「石田 悠が出した謎の物体はまだ解析出来ていないが、我々には100%勝てない」

円堂「勝負はやって見なくっちゃわからないだろ!？」

改「勝負？これは害虫駆除作業だ」

あーこいつら言いやがったよ、害虫駆除だって俺らのことを人間と思つてないよこいつら、よし殺ろう

悠「おめえらさあ……」

円堂「おい悠？悠!？」

悠「おめえら、俺らの事を害虫と言つたよな？それ言う時点で人として終わつてるかな？それとこれ以上挑発してみろ？お前ら潰すよ？」

こいつら……殴る！潰す！完膚なきまでに粉々にする！

すると円堂が

円堂「やめろ! 悠それをしたら試合に出られなくなるぞ! それと、みんな怯えてるから! やめろその威圧!」

円堂に止められ俺は正気に戻った、やべえーまたガチギレしちゃったよー、流石に人とのことを害虫とか言う奴はありえないわー人としてまじでー

悠「お前ら、100%勝てないって言うのならここで証明しろ、俺がお前らのゴールに向けてシュートをする、そして円堂はお前らのシュートを止める。どうだ?」

杉森「良いだろう」

そして、俺と円堂、杉森と改の勝負になった。

悠「円堂、化身を使え」

円堂「どうしたんだよ悠?」

悠「あいつらは俺らのことを侮辱した、だから本気で相手をするいいいな?」

円堂「わかった! 俺たちを馬鹿にしたことを後悔させてやる!」

そして最初は円堂の番だ。

改「では始める」

円堂「よし来い!」

そして笛が鳴り改はドリブルを始める、そして必殺技の体制に入ったが…

円堂「なに!？」

それはみんなが思いもしなかったことが起こった

改「星砕き!」

えーそれ俺の技!お日さま園のみんなにサプライズの為に頑張って練習した技が
!つてかまあモノマネ大好きな人だからねやるよね普通に

そして改は俺の必殺技を繰り出すのだが:

円堂『魔人グレイト!!!』

円堂は魔人グレイトを出し

円堂『グレイト・ザ・ハンド!!!!』

改「なに!？」

円堂は難なく止めた。

杉森「まさか、円堂 守にも謎の物体を持っていたとは、計算外だ」

そして、次は俺の番になった。

染岡「悠!絶対に入れろよ!」

穴戸「悠さん!」

悠「スーパー任セロリ!喧嘩売ったこと後悔させてやる」

マックス「最初に言ったことで台無しだよ…」

そして笛が鳴り俺はドリブルを始め化身を出す。

悠『宇宙の覇者 コスモ!!!!!!』

俺は必殺技のモーションに入る

悠『コスモ・ブレイク!!!!!!』

杉森「うわっ!!」

すぎましい必殺技が炸裂し杉森が吹っ飛ばされゴールに突き刺す。

悠「どうしたの? 害虫駆除するんじゃないやなかつたの? あれれーおつかしいなー?」

半田「うわ、追い打ちをかけてるよあいつ…」

風丸「敵に回したら怖いな…」

勝負は俺達が勝ったが俺以外の奴らが新たに悠を怒らせたらダメと言うルールを作ったのは別の話であった

夏末「伝説のイナズマイレブンの秘密特訓場、イナビカリ修練場よ」

悠「まじかよ…秘密の特訓場とかそんなのあるわけないと思つてたけどね、てかよくこんなの見つけたね？」

夏末「見つけたの、お父様の手伝いをしていてたらね、それでリフォームして必殺技の練習場としてね」

円堂「使つていいのか!？」

夏末「ある物は使わないと損ですからね」

円堂「本当か!すげーありがとう!」

夏末「私はただ、無様な負け方をして、わが校の恥になつて欲しくないだけよ」

はいこの人ツンデレやなー全く隠すのが「何か言つたかしら?」あれ?この部活のマネージャーってみんな心読めるの?

そして俺達は練習の位置に着くといきなり扉が閉まり 9999秒のカウントダウンが始まった時間にして2時間46分39秒だ、うん!ものすごく分かりづらいね!キリのいい数字にしろ!

夏末「この扉はタイマーロックになつていて、一連の特訓が終わるまで開かないわ、頑張つて」

と夏末が言い終わると機械が動き出しみんな恐怖して叫んでいるが1人だけ違った

…

悠「これ、クソ面白い！飽きないわー」

これを聞いた他の奴らはやっぱりこいつ頭のネジ飛んできると思った。

そして時間が過ぎ扉が開くと俺以外のメンバーは倒れていた。

栗松「死ぬかと思つたでやんす…」

穴戸「イナズマイレブンってこんな特訓してたんだ…」

半田「結局新必殺技が出来なかつた…」

みんなの怪我を見たマネージャーは急いで救急バックを取りに行つた

円堂「元気だせ、伝説のイナズマイレブンと同じ特訓を乗り越えたんだぜ」

豪炎寺「その通りだ、この特訓は無駄にはならない」

悠「そうそう、あとこれを一週間ぐらいやるからね？てかもう一回しない？」

「「しねえよ！」「」

えーホントでござるかあ？まあ俺は育てかたが違うからな！意味深な感じじゃあないよ？

そんなことで一週間が経ち御影専農との試合当日になった。

ポジション？いつも同じだよ？だけど今回は人が変わったんだよねー

F W

染岡 豪炎寺

M F 少林 悠 マックス 半田

D F 風丸 壁山 土門 栗松

G K 円堂

のポジションだ、今回から土門はスタメン出場になった。原作通りやね、そして試合のホイッスルがなり試合開始だ。

角馬「雷門ボールでキックオフ！早くも豪炎寺から受けたボールを持って染岡切り込んで行く！」

まあ ここまではいいんだけどねーここからあいつらは機械じみた動きするから不気味なんだよなー

すると染岡からパスを貰った豪炎寺はシュートしようとするが相手に囲まれる

染岡「豪炎寺、こっちだ！」

そしてパスを貰った染岡がシュート体制に入る。

染岡「ドラゴンクラッシュ！」

シュートを放ちたが、御影専農の守備陣がボールを足で手触り威力を落としていき最後の杉森はらくらくボールをキャッチしてた。

豪炎寺「なに!?!」

染岡「なんだあの守備は!?!」

杉森「驚くことはない、君たちの攻撃パターンは完全にデータ通りだ、従って簡単に予測できる！」

と言つてボールを蹴り相手は攻めてきた。

悠「言い忘れたけど、いつまでもデータ通りだと思つてるわけないよね？」

杉森「どうゆう事だ？」

すると風丸がスライディングをしてボールを奪い穴戸にパスを出す。

円堂「ナイスだ風丸！」

土門「あいつよく間に合つたな」

そしてベンチからも

音無「風丸先輩つたらあんなに速かつたかしらか」

まあイナビカリ修練場のおかげでパワーアップしてるよね普通に考えて

すると束の間穴戸はボールを奪われ相手はパスを駆使してシュートするが円堂が止めとして、豪炎寺にボールが渡りシュート体制に入る

豪炎寺「ファイアトルネード！」

そして杉森は

杉森「シュートポケット！」

シュート止められたと思つたが

角馬「あーと！弾かれた！」

そしてドラゴントルネード、イナズマ落としをするがこれも弾かれた。そして相手のボールになりまたパスを駆使してシュートするが

円堂「熱血パンチ！」

だが弾いた先に御影専農の選手がボールヘディングしそのままゴールに入る。

角馬「決まった！決まってしまった！ここで御影専農1点先取！」

円堂「くつそお！」

悠「円堂落ち着けてまだまだ1点取り返せばいいさー」

そして俺のボールで再開したがいきなりボールを奪うとすぐさまバックパスをする

悠「おいおい嘘だろ!?!そんなこと普通するか!?!フェアプレーの欠片がないぞ！」

そうこいつらは戦わず時間を使って勝とうとしていた。

うわーそれ前世では一回もされてないぞ?ゲームだとオンラインとかで煽りややる

やついるけど…

そして時間が過ぎていき前半が終了した。

そしてロツカールームで行く最中杉森を見つけ円堂は言った。

円堂「杉森！なんで攻撃しないんだよ！あれじゃあサッカーにならないだろ！」

杉森「それが監督命令だ」

円堂「なんだって!？」

杉森「10点差でも1点差でも同じ勝利だ、リスクを冒さずタイムアップを待つ」

円堂「何もかも計算通りに行くと思ってるのかよ!」

悠「まあ式があるのなら計算通りにいけるけど、俺達は成長してるんだぜ?そんな式がないのに勝てると思うなよ?」

そして後半が開始した。そして後半も相手が自軍でボールを回してる

悠「円堂これからどうする?」

円堂「くそ攻めてこないならここに居てもしょうがない」

すると円堂はゴールの位置から離れ前線に上がった

土門「ええー!？」

悠「しょうがないなー土門!一緒にここ守るぞ!」

土門「お、おう:」

角馬「なっ、なんと!キーパーの円堂がゴールをがら空きにして攻撃参加!」

円堂は御影専農からボールを奪いドリブルしてる

杉森「なんだと!？」

そして円堂はシュートをすする

杉森「データにない!君のシュートはデータにない!」

と言ってシュートを止めた

円堂「くっそー！」

円堂は悔しがっていると

杉森「なぜお前が攻撃に参加する！」

円堂「点を取るために決まってるだろ！それがサッカーだ！」

悠「早くゴールに戻ってくれない!? ゴールガラ空きなんですけど!？」

俺は大声で叫び円堂に戻す。そして雷門と御影専農の激しい攻防をするが、改がボールを持ちシュート体制に入ると

円堂「豪炎寺！こっちだ！」

豪炎寺「円堂何をするつもりだ!？」

そして改は必殺技を放つ

改「パトリオットシュート！」

そしてパトリオットシュートを2人は打ち返そうとした。すると

円堂 豪炎寺「イナズマー号!!」

パトリオットシュートを跳ね返しシュートはそのまま杉森のいるゴールに突き刺さった。

角馬「ついに雷門中がゴール！円堂と豪炎寺の新たなる必殺技でついに同点に追いつ

いた！」

円堂「やったぜ！守備と攻撃が同じなら奴らも対応出来ないんだ！」

豪炎寺「ああ、あんな技が決めれるなんて」

悠「ありやりやーまさか円堂がシュートして入るとは思わなかったわー」

そして試合再開をすると俺はボールを貰い豪炎寺に話した

悠「よし！豪炎寺！さっき円堂とやったことやるぞ！」

豪炎寺「いきなりは無理だ！」

悠「大丈夫だろ！円堂としたんだから」

そうしてダメ元でシュート体制に入った。すると

悠「いくぞ！」

豪炎寺「おう！」

悠 豪炎寺「「イナズマー号!!」」

と言ったがそれはイナズマー号ではなく炎と謎の光が合わさったシュートになった。

杉森「シュートポケット！」

謎のシュートを杉森は止めようとするがそのままゴールに入る。

角馬「ゴール！また新しい必殺技を放ちついに！逆転だあ！」

悠「あれ？イナズマー号にならなかったけど入ったからまあOKだな！」

豪炎寺「お前、たまに円堂と似てることをするよな……」

だけどこの技は未完成だ。まだまだ特訓しないと必殺技にならない。てか完成して
いないのにこの威力は異常だろ……

そして2―1になり試合が再開して染岡がドラゴンクラッシュを放つと杉森が気合
で止めた。そして仲間を鼓舞すると御影専農の奴らの動きが変わった。

そしてまた激しい攻防になり円堂が豪炎寺にパスをし豪炎寺はファイアトルネード
を放とうとしたら改が現れ、豪炎寺と改のパワー勝負になったが2人はそのまま落下し
そして試合が終了した。

が、次の日

円堂「えー!? ドクターストップ!?!」

豪炎寺「すまん、次の準決勝は出場できない」

悠『最後の接触で怪我したのか』

円堂「そんない」

豪炎寺「すまん……」

第16話 趣味に没頭するっていいよね…

豪炎寺が怪我をし病院に行ってる時、俺達は部室で会議をしていた。

木野「地区予選準々決勝の尾刈斗中对秋葉名戸学園戦、この試合で勝ったチームと準決勝で戦うことになるわ」

風丸「尾刈斗中って」

円堂「あいつらかー」

あーあいつらかーその時俺T U E E E E状態したから覚えてるわー

木野「猛特訓したうえに戦力を強化したそうよ」

染岡「あいつらがさらに特訓を!？」

悠「俺がゴーストロックを見破ったからもう使えなくなつて猛特訓したんじゃね？」

栗松「どうしてくれるんでやんすか！」

悠「いやーねーなんかできちゃったんだもん」

いやー原作知ってるからしょうがないじゃないかー（え○○か○○）風

夏末「で？相手の秋葉名戸学園はどんなチームなの？」

木野「学力優秀だけど少々マニアックな生徒が集まった学校、フットボールフロンティア出場校中最も最弱の呼び声の高いチームで…な、なにこれ!？」

と急に木野が顔を真っ赤にした、なににー?どうしたのー?恋愛話?けっ!前世では恋バナすらししたことないわ!

すると円堂が喋った

円堂「どうした?」

木野「尾刈斗中との試合前もメイド喫茶に入り浸っていた…ですって!」

するといきなり目金が

目金「め、メイド喫茶ですと!？」

夏末「なに…それ…」

いや…あんたの場合リアル召使っているしな…

マックス「そんな連中がよく勝ち進んでこれたね」

栗松「こりやあ準決勝の相手は尾刈斗中で決まりでやんすね」

悠「おいおい…どっちにしろ油断するなよ?こっちは豪炎寺がドクターストップでないんだぞ?気を引き締めろよ」

すると慌てて音無が部室に入ってきた。

円堂「どうした?」

音無「いま、準々決勝の結果がネットにアップされたんですけど！」
と言い結果を見せた、すると……1―0で秋葉名戸が勝った。

円堂「尾刈斗中が負けた!?!」

壁山「あの尾刈斗中を倒すなんて……」

円堂「どんなチームなんだよ……秋葉名戸……」

すると目金が急に喋り出す。

目金「ふつ、これは行ってみるしかないようですね、メイド喫茶に」

まじで何言ってるの? みんなが思っていると目金はさらに喋る。

目金「秋葉名戸学園とやらがあの強豪尾刈斗中を破ったのはきつとワケがあるはず、そのワケはメイド喫茶にあると見ました。行きましょう! 円堂くん!」

円堂「でつでも……」

円堂「負けるな! 負けたらお前も違う道を辿ることになるぞ! まあ、負けても辿らないと思うけどさあ……」

目金「僕は秋葉名戸学園のことをなにも知りません、これは試合を有利にするための情報収集なのです!」

円堂「なるほど……よし! 言ってみようぜ!」

えっ? ちょ! 円堂ちゃん!? なに納得されてるの!? 絶対目金はメイド喫茶に行きたい

ただだぞ！なぜ分からない！

マックス「まじかよ！」

悠「それだったら、今回俺はパスで」

目金「なんでですか!？」

悠「だって、いつも俺が情報を調べてるからたまにはお前らがした方がいいかな？と思っただけだぞ！本当だ！」

まあ…いつも俺が調べてるけど他の奴らは調べてないんだもん…：円堂なんてパソコンを使つてるところを見たことないぞ…

円堂「それならしょうがないな！よし行くぞ！目金！」

よかった…：メイド喫茶にはまじで行きたくない…：前世でも行つたこと無かったしな、だつてメニューとかおかしな名前だし、女子と喋り続けないといけないしな…てか、なんかメイドさんは裏だとボロクソに言つてると思つてしまふし…：よくいるじゃん？表では仲いいアピールしてるけどいいないとボロクソに言つてる子、なんで仲良してるからまじで分からないわ…：てかアニメでメイドを本気で楽しんでるやつしか見たことないぞ…：カッター少女を思い出した、電〇〇師みたいな先生欲しいよね！みんな！

※これは主の独断と偏見です。気を悪くした方はすみません

あーそうだー確か秋葉名戸ってあの技出してくるからそれ対策のやつ覚えないと

なー煙を起こしてくるからそれを吹き飛ばす感じかな？

悠「さーてと、それじゃあいつちよやつてみるか！空気を吸って…せーの！う○
○やー！！つてこれはだめだ！やばいやつだ！」

と1人で茶番していると急に後ろからボールが飛んできた。俺はそのボールを足で止めて周りを見る。

悠「あぶねえ！てか誰だよ！俺にシュートを打ったやつ！」

???'「と言いつつ普通に止めてるじゃない！全く！」

悠「お前は…杏なのか!?お日さま園の別れ以来だな！」

おいおい嘘だろ?ここで出てくるなんて聞いてねーぞ…

杏「相変わらず1人で特訓してるの？」

悠「まあねーつてそう言えばお前と他の奴らは今何してるんだ？」

杏「ま、まあいろいろと…そう！いろいろと！」

お兄ちゃん分かるよー富士で特訓でしょ?隠しても無駄だよー?まあ今は言えないかー

悠「それで今日はどう言った要件で来たの？」

杏「久しぶりに会ったんだから昔みたいにサッカーで勝負よ！」

悠「まじで?まーたスライディングしかないんでしょ？」

杏「昔とは違うの！私が成長した所見せてあげるんだから！」

そう言い位置についた、改めてルールを言う俺がドリブルし、ボールを取ったら杏の勝ち、逆にボールを取られずに抜けば俺の勝ちだ

悠「それじゃーいくよー？」

杏「ええ、来なさい！」

そして俺がドリブルし杏がボールを取りにかかる

まあーどうせあの杏だ。結局スライディングって言うのがオチだよなーってスライディングしてこない！

悠「嘘だろ!? スライディングばかりする杏がスライディングをしないだど!?」

杏「いつまで馬鹿にするのよ！昔の私と違うんだから！」

悠「そうかーじゃあ取っておきのやつ見せるわ」

そう言っ俺は必殺技を出した

悠「花鳥風月!!」

杏「!？」

と言い杏を躲す

悠「はいよ、俺の勝ち」

杏「また負けたーてかまた新しい必殺技覚えてるし！なんなのよ！」

悠「だから昔から言ってるんじゃない、俺はお前のよりも先に進んでお前らを引つ張るつて」

杏「そうだけど… 悠に勝ちたかった… (ボソツ)」

あーこれはいじけたかなーしよぼくれちゃったかーもうーしよがないなー杏ちゃんはーテツテテテーンテーン (ドラえもん風)

悠「だけど、杏成長したねーびつくりしたよ (ポン)」

杏「ちよつと急に撫でないでよはずかしいんだから… / / /」

悠「そうか、ごめん」

きやー杏がデレてるーかわ「なんか言った？」

悠「いやなにも？」

杏「お前もその技を持っているのか…」

杏「そう言えば私がシュートする前に1人でなにしてたの？」

悠「ああ、新しい必殺技かな？」

杏「また必殺技を考えてるの!？」

悠「まあねー今度は色々なシリーズを出そうとしてるんだ!」

杏「へえーそれじゃあ手伝おうか？」

悠「本当に!?! ありがとう!」

杏「べ、べつに楽しそうだから手伝うだけだからね！」

わーおこの子ツンデレーカー か（ドゴツ

悠「ゴフっく…」

杏「ふざけないで」

悠「さ、サーセン…」

そして、俺と杏は必殺技の練習をした。

第17話 目金立つ！

あれから杏と必殺技の特訓をして必殺技が完成した。

え？そのあとの話は？って？バカお前この後デートみたいになるとか思った人いるか？んなわけないでしょ！だって…

悠「ふう…やつとできたー」

杏「やつと出来たって言っても…いきなり5つも覚える普通!?バカじゃないの!？」

って杏言つてたよその後にイミワカンナイ!とか言つてたなーお前前世スク○○○
○ドルやつてただろ！

そんな茶番を脳内ですて、その後は杏と別れた。いやーこれ多分他のやつも来るんじゃないかな？んー… フラグかな？フラグじゃないよ、フラグだよ！ヤベーなこれ俳句してる時点でフラグだわーとか字余りしてるし…あと俳句ってこれであってるか？

まあその後は円堂達と練習をして秋葉名戸学園との試合になった。

みんな知つての通り夏未はメイド服を着せられシヨートしました。オマケに写真撮られたし…よし！写真貰つてイタズラでもするか！

そして俺達はフォーメーションを決めているんだが…

円堂「んー豪炎寺の代わりはー」

土門「はいよ、俺ね」

と土門が笑顔で言ったが

目金「ここは、切り札の出番でしょう」

円堂「切り札?」

目金「メイド喫茶に行つたおかげで彼らのサッカーが理解出来ました。僕が必ずチー
ムを勝利に導いてあげましょう!」

えーだつてーこいつー威勢だけはいいけどさあ:

そう思つてたら意外な奴が目金の意見に賛成をした。

豪炎寺「いいんじゃないか?」

土門「そうね、やる気満々みたいだし何とかなるんじゃない?」

円堂「ああ、そうだな!よし!今日はお前がFWだ!頼んだぞ!」

と円堂が決めたが

夏末「ちよつと待つて!彼が豪炎寺君の代わりで大丈夫なの?あまりにも危険な賭け
じゃない?」

悠「円堂、流石にそれはダメじゃない?帝国との練習試合の時に逃げだしたから正直
他の奴らの信用がないと思うぞ?」

てれっんてててれんてーれーれん♪

え?なにこれって?みんな知ってるでしょ!CMに入る前に流れるやつー回ぐらいやってもいいんじゃない?と思つてやつちつたてへぺろ。*。*

そして試合が開始されたのはいいけど秋葉は攻めてこないでふざけながらパス回しをしている。

なんだよ:ネガ○○○○アームス○○○○ング砲とか言つて:いいセンスだ!つて危ねー○○ストローム○○ムストロ○○砲は流石にやばいつてーあつ!あの作品はパ口つてるからいいか!

と思つてたら前半終わってしまった。

角馬「ここで前半終了のホイッスル!0対0のまま後半を迎えます!」

そして俺達はベンチでミーティングをしていた。

目金「まるで攻めてこないなんてこの僕にも予想外でしたよ:」

染岡「おまえアイツらのサッカーが理解できたんじゃないや無かつたのよ」

半田「それにしてもなんでボールが取れないんだ?」

風丸「あいつらの妙な乗り調子を狂わせたせいだ」

影野「得体が知れない:」

おい影野、人の背後で言うなよ:豪炎寺と夏未がビビつたぞ

豪炎寺「お前もな」

そして秋葉名戸学園の奴らはみんなゲームをしていた。

夏末「よくわからないチームだわ」

悠「多分後半はなんか仕掛けてくるんじゃないか？」

円堂「とにかく、ボールを奪いチャンスを広げるんだ！」

そして後半が開始されると同時に秋葉の奴らが一斉攻撃をしてきた。

マックスはフェイクボールと言う必殺技で抜かれセンターリングを上げられそのまま根性バツトでシュートされ1点取られた。

角馬「決まったー！後半開始直後雷門中の立ち上がりのスキをついた秋葉名戸学園が先取点をとりました！」

円堂「こんなシュートを隠し持っていたのかよ」

そして雷門中ボールで再開する。

染岡「あんな奴らに先制を取られるとはな」

目金「だから言ったのです。油断は禁物だと」

そして再開の笛がなると相手チームは全員守備をした。

円堂「あいつら全員で守るつもりか！」

染岡「そうはさせるか！」

と言い一人で攻め上がりシユート体制に入ると

マンガ「いくぞ！五里霧中!!!」

そして染岡が

染岡「ドラゴンクラツシュ!!!」

を放つがボールはゴールを外れた。そして何度もシユートをするが相手が五里霧中をするとゴールを外れる様になる

さーとそれじゃあ種明かしをしますかね！

悠「俺にボールをくれ！シユートを決める！」

半田「よし、分かった！」

そして半田からボールを貰いゴールに向かってドリブルをする。

マンガ「何度やっても無駄ですよ！五里霧中!!!」

悠「そんなもの効かないよ！お前らの技は見破ったからね！いくぞ！ドラゴンの力を味わいな！」

そして俺は新しい必殺技を出した

悠「天竜の咆哮!!!」

すると土煙と秋葉名戸の選手が吹き飛びそのままゴールに突き刺す。

角馬「ゴール！これで雷門中！同点に追いついた！」

そして五里霧中の正体が分かった。

悠「五里霧中の正体は土煙起こしその隙にゴールを動かしていたんだ！」

円堂「ゴールをずらしてる!？」

豪炎寺「シユートが入らなかつた訳はこれか！」

すると目金は

目金「これが君たちの勝ち方ですか！」

マンガ「僕達は絶対に勝たなきゃならないんでね！」

目金「だからと言ってこんな卑怯なことを！」

ライト「勝てば良いのだよ！勝てば！」

おいおい何処のセリフだよそれ久しぶりに聞いたわ……

そして試合再開し俺がボールを奪うと

目金「僕にボールを下さい！」

円堂「悠！目金にボールを渡せ！」

悠「しようがないなーほれ！受け取れ！」

ボールを貰った目金は秋葉の選手を1人1人論破してドリブルをしていく。おお！

言葉という弾丸を放って論破してる！

そして目金は染岡にボールをパスする

目金「染岡くん！僕に策があります！」

染岡「わかった！ドラゴンクラッシュ!!!」

染岡がドラゴンクラッシュを放つが

アイドル「ゴールずらし!!!」

相手がゴールをズラすと同時に目金がダイビングヘッドをしコースを変えゴールした。

角馬「ゴール！目金がドラゴンクラッシュの軌道を変えゴールに押し込んだ！これで

雷門は逆転だ！」

そして試合の笛がなり試合終了になった。

俺達が試合勝ったあと目金と秋葉との奴らで友情が芽生えた。

次は帝国か…

第18話 帝国のスパイ！

俺達は秋葉名戸学園に勝ち、次の決勝の帝国学園との試合に備え練習をしていた。そして雷雷軒で飯を食うことになったのだが…

土門「わりのい、俺先帰るわ」

円堂「ん？そうか、また明日な！」

悠「円堂ー早く頼めよーみんな待ってるぞー」

円堂「わかった」

土門の奴なんか焦ってるよなーまあー知ってるけどな…

次の日の朝、俺は土門にバレないように跡をつけて行くと学校のガレージで冬海先生と話していた。

土門「こんな所で何やってたんですか？」

冬海「さあ？何でしょうねー」

と言いつつ冬海が外に出ようとするが…

冬海「ああ、一つだけ忠告しときますよ。このバスには乗らないことです。」

そして冬海がガレージから出てくる。

危ねー…木の裏に隠れていて良かった…。ここでバレたらおじやんだからなー冬海先生が出たあとで土門はクソオ!と言つてたし…迷つてるなーあいつ…

そして俺はその場を去った。そして部活の時間になりウォーミングアップでジョギングしていると土門は1人でどこかに行つてしまった。

悠「円堂、土門がどこかに行つてしまったから呼び戻していいか?」

円堂「ああ、いいぞ!」

悠「サンキュー」

そして俺は土門の所に行こうとしたのだが

音無「悠さん、私も付いて行っていいですか?」

悠「別に良いけど、どうして?」

音無「部員の精神状態をケアするのがマネージャーの務めですから!」

あつ…やつぱりマネージャー仕事しすぎい!正直ありがたいわスポーツやつてる人!マネージャーは大切にだぞ!…何言つてるの俺は…

そして俺と音無は土門を探しに行き、土門を見つけたのだが、何故か帝国の鬼道がいて土門と口論をしていた。

悠「なんであいつが雷門にいるんだ?」

すると

音無「お兄ちゃん！」

悠「えっ？お兄ちゃん？」

音無「雷門中の偵察にでも来たの？」

鬼道は音無の言葉を無視し帰ろうとするが

音無「待って！」

音無は鬼道の腕を掴むが鬼道はそれを払い喋る

鬼道「俺とお前は会っちゃ行けないんだよ」

そして鬼道はそのまま帰って行った。土門も音無が鬼道の妹だということに動揺していた。

悠「なんかーシリアスな感じになっちゃったんだけどーどうしよう…」

音無「この事は皆さんに内緒にしてください…」

悠「わかってる、だけでもうー人聞いているけどまあ大丈夫だろ…あーそれと迷ってるなら本当の事を話したらどうだ？あいつらなら拒んだりしない」

俺は土門にそう言って去っていった。

そして次の日、俺達が練習していると珍しく冬海先生が見に来てる。そして夏未と話をしていると

冬海「バツ、バスをですか!？」

と冬海先生は大声を出し、そして俺達はバスの調子を見るためにガレージに来ていた。そして運転席に冬海が座り運転をしようとするが何もしない。

夏末「どうしたのですか? 早くエンジンをつけてください」

冬海「あつあれ? おかしいな? バッテリーが上がってるのかな?」

悠「んなわけないじゃないですかー昨日冬海先生点検してたじゃないですかー見てましたよ?」

夏末「ぶぎけないで下さい!」

冬海「はい!!」

うわー怖ー夏末怖ー! これは未来の円堂も大ゲフンゲフン!

そして冬海先生はエンジンをつけ動かそうとしていたが

冬海「出来ません!」

夏末「どうして?」

冬海「どうしてもです!」

悠「まさかー先生バスに何かしたとかないでしょうね?」

そして夏末は手紙を掲げ問いただめると冬海は謎の笑いをしながら降りてきた。

冬海「そうです、私がブレーキオイルを抜きました。」

円堂「なんのために！」

冬海「あなた方をフットボールフロンティアの決勝戦に参加させないためです。」

円堂「なんだって!?!」

悠「それって帝国の監督か？」

冬海「!?!」

豪炎寺「帝国の為なら生徒がどうなってもいいとでも思っているのか！」

まあ豪炎寺は妹の事があるからムキになっているよなー普通に考えて

そして冬海は喋る

冬海「君達は知らないんだ！あの方がどんなに恐ろしいかを……」

豪炎寺「ああ！知りたくもない！」

夏末「貴方のような教師は学校を去りなさい！これは理事長の言葉と思つて貰つて結

構です。」

冬海「良いでしょう！ここの教師も飽き飽きでしたし、それと帝国のスパイが私だけとは思わないことだ……ねえ？土門くん？」

冬海が土門がスパイと言うことをバラすとみんなは驚きを隠せなかった。そして冬海はそのまま去っていった。

栗松「そう言えば帝国学園に居たって」

染岡「そんなのありかよ!」

壁山「そんな!土門さん酷いっす!」

そして他のやつも酷いなどの文句が飛び交った。

そして円堂は

円堂「バカなこと言うな!今までサッカーをやってきたじゃないか!その仲間を信じられないのか!俺は信じる!なあ!土門」

そして土門は喋る

土門「円堂…冬海の言う通りだよ…」

円堂「え…」

土門「わりい!」

悠「おい!待てよ!あーもう!俺は追いかけるからお前らはなんか考えとけ!」

俺は急いで土門の後を追った。

そして河川敷で座ってる土門を見つけ俺は歩み寄る。

悠「調子はどうだ?土門?」

土門「悠…」

悠「まあー自分が仲間を裏切り心が痛むのは分かる…俺も薄々感じていたけどよ…今は皆も気持ちの整理がついていないけどな……だけどあいつらはお前を見捨てねーよ

！」

そして俺は昔の話をした。

悠「俺は昔孤児院に居たんだ：あの時は、俺は園のみんなといつまでも一緒だと約束してた。だけどある日俺は今の両親にひきとられることになってしまったな、みんなを裏切る事になつてしまった。だけどあいつらは笑顔で俺を見送つてくれたんだよ、まあ要するに本当の仲間だつたら、たとえ裏切られても笑つて許せるんだよ！だからクヨクヨするな！」

土門「だけど：だけど俺は！
すると

木野「おーい！2人ともー！」

悠「木野じゃん！どうしたの？」

木野「話かな？」

そして木野は昔の話をした。木野と土門は昔アメリカに住んでいて、一ノ瀬という男と一緒に3人仲良く遊んでたらしい。だけどある日、子犬を助けるため一ノ瀬はトラックとの衝突で他界してしまった。

うわー言いてー実は生きてました！なんて言つたら驚くんだろうな！2人とも！

すると木野は

木野「だけどさあ、こつちに帰ってきて円堂さんと悠さんに会ったの。2人ともおかしんだ」

悠「え? 酷くない!? 俺いるのに言うの普通!?!」

そして木野はスルーして俺と円堂がものすごく楽しくサッカーをやっている所がーノ瀬に似ていると言ってきた。

土門「2人は一ノ瀬とは違う、2人は俺と一緒に走ってるんだ。あいつらとならいつまでも走ってられる…だけどみんな怒ってるだろうな…」

悠「そんな訳ないだろ! 見てみるよ!」

すると円堂がいきなり現れた

円堂「土門! サッカーやろうぜ! ほら! 早く!」

土門「えっ…」

悠「だから言っただろ? お前を拒んだりしないって?」

土門「ああ!」

そして後日、土門はみんなに謝り仲直りをしたのはいいけど…

目金「1ついいですか? このフットボールフロンティア規約書によると監督がいないチームは出場を認めないと書いてあります。」

悠「おいおい…お前知ってて言ったのか?」

夏未「し、知ってたわよ！だから貴方達はすぐに監督を探しなさい、これは理事長の言葉と思つて貰つても結構です！」

と夏未は顔を赤らめて言つた

悠「いや！お前それ今気づいただろ！何勝手に仕事を押し付けてるんだよ！」

うわー最終的に監督探さねーとなー…

第19話 監督スカウト

俺達は何処かの生徒会長のせいで監督を探すことになっていたのだが…

円堂「手分けして新監督を探すんだ！」

風丸「誰でもいいって訳じゃないぞ？ 帝国と闘える人じゃないと」

土門「そうだな、慎重になるべきだ」

土門の言う通りなんだよな新監督をゲットしてもあつちと繋がりがあつたら意味ないし

円堂「じゃあどうすればいいんだよ！」

あー円堂が痺れを切らしたーてかあの人はどうだろう？

悠「あつ！ 確かラーメン屋のおやじは円堂のじいさんを知っているんだからサッカー知ってるじゃね？」

円堂「それだ！」

そして俺達は一目散で雷雷軒に行く、あつ金持って行かないと

それで雷雷軒に着いたのが良いんだが

「「監督になって下さい！お願いします！」」

雷雷軒の店長「仕事の邪魔だ」

円堂「あのー俺のじいちゃん知ってるんですよね？秘伝書のことも知ってた、だったらサッカーも詳しいんじゃないですか！」

土門「あるいは、円堂のおじいさんとサッカーをやっていたんじゃないですか？」

おいこの人ちよつとピクつてなつたぞ！ピクつて！凶星だから反応しちゃうのね

円堂「本当か!？」

土門「勘だよ、秘伝書のことを知っていたんだ、伝説のイナズマイレブンじゃないのかなって」

え？この人勘よすぎない？名探偵ドモンになるつもり？あつているのただけだぞ？

そして雷雷軒のオヤジが言った

雷雷軒の店長「あのなー注文しないんならとつと出ていけ！」

物凄く正論だ！頼まないんならただの冷やかしだもん！

すると円堂は

円堂「だったら注文すれば良いんだろ！ラーメン一丁！」

雷雷軒の店長「はいよ、ラーメンね」

円堂「財布部屋だった…」

と木野の方を見ると

木野「大丈夫ちゃんと部室の鍵はかけたから」

たまに木野つて天然のところあるよねーアハハ

円堂「そう問題じゃなくて…やっぱラーメン取り消し…」

雷雷軒の店長「でてけ！」

と言いみんなを追い出す、さてと俺も出ようかな？え？何処に出るつて？そんなの簡単だよ！トイレから出るんだよ！

悠「ふう、スツキリつてあれ？みんなは？」

雷雷軒の店長「他の奴らは帰ったぞ、でお前は何か頼むのか？」

悠「一応店に来たんでチャーハンと餃子で。その代わり、話聞いてくださいよ？」

雷雷軒の店長「わかった、チャーハンと餃子な」

すると隣にいた刑事が喋る

刑事「イナズマイレブンか…いいチームだったよなー」

悠「え？なに？おっさんもイナズマイレブン知ってるんですか？」

刑事「まあな、あのキャプテンの坊やゴッドハンド使えるぞ」

悠「それは本当ですよ、イナズマ落としもイナズマー号も覚えてますよ？」

そのあと俺は話をし、雷雷軒の店長の名前が響、隣にいた刑事が鬼瓦つて事がわかつ

た、なお響さんはイナズマイレブンに關係あるらしい。

そして俺はチャーハンと餃子を食ベ終わり、みんながいる河川敷に行くところには円堂と鬼道が話してた。

円堂「んなことないって！」

鬼道「お前に何がわかる！」

悠「円堂ーそれに鬼道!?え!?なんでいるの?」

円堂「悠!どこに行つてたんだよ!」

悠「まあ、いろいろとね…」

呑気に飯食つてたなんて言えねーよ

鬼道「お前か…」

悠「まあ、なんだか知らないけど俺達は何があつても負けないからな!」

鬼道「お前達との試合、楽しみだ」

そう言つて鬼道は去つた。

そして後日、俺は説得の方法を思いついたらしい円堂とまた雷雷軒の店に行き説得をしに行った。

響「またお前らか」

円堂「また俺らだよ!」

響「何度来ても変わらんぞ？」

円堂「俺と勝負しよう！」

響「勝負だー？」

悠「なんか知らないんですけど 3本勝負で全部円堂が止めたら監督になつてくれませんか？」

響「しょうがないな」

そして俺達は河川敷に移動をする。

悠「二人とも準備は大丈夫すか？」

円堂「いいぞ！」

響「ああ」

悠「それじゃあ 開始！」

一本目はカーブボールを弾き、2本目はダイレクトシュートを円堂が熱血パンチで弾く、そして3本目

悠「あと1本ですよ？」

響「わかつてる、鬼瓦のおやじが言ったことが本当なら見せてみろ！」

そして3本目はこれまでにない威力のシュートだそして円堂は

円堂「ゴッドハンド!!!」

円堂はゴッドハンドで難なく止めた。

響「あれは、正しくゴッドハンド！」

悠「円堂やったな！」

円堂「ああ！」

すると響は笑いながら

響「アハハ、こいつは驚いた！大介さんがピッチに帰ってきやがった！おい孫、名前なんて言うんだ？そこのボウズも」

円堂「円堂 守！」

悠「俺は石田 悠です」

響「守に悠か、いい名前だ」

そして俺達は新たに響監督を入れ新しい雷門がスタートした。

第20話 兄妹の絆!

では問題です!今俺達は何処にいるでしょーか!

正解は越後製菓!!!

すみませんふざけました、正解は電車の中です!

と茶番をしているが電車に乗っている理由は、決勝のグラウンドは帝国学園でやる事になっており、いま俺達は向かっている。え?バスは?だって?だってあの不愉快がやらかしたからー え?漢字が違うって大丈夫!読みはあってる!

そして円堂は

円堂「いよいよ地区大会決勝だ!あの帝国とまた戦える特訓の成果見せてやろうぜ

!

「「「おお！」」」

悠 「円堂、座席の上に立つな！行儀悪い！人様の迷惑！」

木野 「しようがないよ、みんな張り切ってるし私も頑張らなくちゃ！」

円堂 「雷雷軒のおやじさん！じゃなくて響監督！」

そして響監督が一言を言う

響 「俺からはたった一つ、全てを出し切るんだ！後悔しないために！」

「「「はこ」」」」

響監督の一言が終わる。てかあれ？何か忘れてるような？

音無 「あれ？夏未さんは？」

木野 「電車は嫌いなんですって」

あーやっぱりお嬢様だわー金持ちだと庶民扱いことが嫌いなものね…だから料ゲフン

ゲフン!!

そんな事より俺達は電車を降り帝国学園の前につくと

円堂 「こんな所で戦うのか」

悠 「なんかあれだね！ゲームで言うラスボスの城みたい！」

染岡 「本当におめえはブレないな…。」

そして俺達は帝国学園内に入ると響監督がいきなり

響「気をつけろ！バスに細工してきた奴らだ、落とし穴があるかもしれない」

そして1年生達は安全の確認をする。

夏末「監督が選手をからかうなんて…」

木野「多分、監督なりの緊張をほぐす方法なんだと…」

うん！君は冗談が得意なフレンズなんだね！何かあったらフレンズなんだね！と言えばいいってじっちゃんと言った！じっちゃんの名にかけて！あつ…今言う場面じゃないか…

そして控え室に入ろうとしたが、先に先客が来ていた。

円堂「鬼道!？」

鬼道「先に着いたみたいだな」

染岡「なんだと！まるで事故でもあった方がいいような言い方じゃねえか！まさかこの部屋に何か仕掛けたんじゃないか?」

鬼道「安心しろ、何も無い」

そう言つて鬼道去る、あれか?スピード○○○はCOOLに去るぜか?小○かよ…俺はハン○○○師匠が面白かったよ!2×9ジューってな!ハンバアアアグ!!!…なんだろう目からおしるコーラが…

悠「すまん、俺ちよつとトイレ行ってくる」

半田「なんだよ、壁山じゃあるまいし」

壁山「酷いっすよ半田さん」

そして俺はトイレに行こうとするがあれは嘘だ、俺は鬼道の後を追うと鬼道はグラウンドに来ていた、その様子を見てみると後から誰かがやってきた。

???「何を企んでるの!」

叫んだ先には音無がいた。

音無「信じないから! キャプテンは騙せても、私は信じないから! 貴方は変わってしまっただけ!」

鬼道「変わったか…」

そして鬼道はグラウンドをCOOLにつてまたやってしまうところだったわ危な! はあーしょうがないなーそして俺もCOOLに…そんなわけもなく、円堂とばったり会ってしまった。

円堂「悠! どこ行ってたんだよ!」

悠「いやー広すぎて迷子になっちゃったよーだけど飲み物はあったよ? ほら?」

円堂「またその甘いのかよ…ん? あれは鬼道?」

悠「ついていくか」

そして円堂と俺はついていくが途中で奴に会ってしまった。

影山「雷門中キャプテン円堂 守君とメンバーの石田 悠君だったね?」

円堂「はい」

悠「あつ…どうも…」

影山「私は、帝国学園サッカー部監督影山」

円堂「えっ」

まさかこいつ…

影山「君達に話がある、鬼道の事だ」

やっぱりな言う思ったよ

悠「鬼道ですか?」

影山「君達のサッカー部のマネージャーの音無 春奈は実の妹だと知っているのかね?」

円堂「え!?!音無が鬼道の!?!」

影山「幼くして両親を無くした2人は施設で育ち、鬼道が6歳、音無 春奈が5歳の時に別々の家に引き取られた。」

やっぱり2人も孤児院出身だったんだな、お日さま園だったらどう変わってたんだろ
う? いやそれより話を聞くか

影山「鬼道は妹と暮らすため養父と条件を交わした、中学三年間フットボールフロン

ティア全国大会で優勝をし続けると、鬼道が勝ち続けなければ引き取ることが出来ないのだ……」

あつこれ円堂……結構心が揺らいでるやん……これはアカンやつやん!

影山「地区大会レベルで負けたとなれば鬼道自身家から追い出されるかもな」

悠「そんな事今言つて俺たちを揺さぶろうとしてるんですか?」

影山「まさか、そんな事はないよ、それじゃあ……」

そして影山が去ると同時に響監督が来た

響「大丈夫か二人とも影山と何を話してた」

悠「ただのお喋りですよ?なあ?円堂?」

円堂「あ、ああ」

その後俺と円堂はアップをするが途中で円堂はどこかに行つてしまった。

悠「円堂はどこ行つたんだよ全く……おい木野ー円堂探しに行つてくれないか?」

木野「わかった」

さてと俺もちよつと仕事という名のお節介をしましょうかね

そして俺は控え室の方に向かつていると2人は話し合っていた。

音無「私が邪魔だったんでしょ!だから連絡もくれなくて!」

悠「おい、その辺にしとけ」

音無「悠さん……」

鬼道「悠……」

悠「兄妹で話している最中に悪いけどお節介をしてやろうかな」と

と俺は笑い、その後に真面目な顔になる

悠「正直お前らの関係を知った時は驚いた……だけど鬼道が関わるなど言った時の顔が悲しかったのを覚えてるんだ、それは何か重要な事を隠してるじゃないかと思っただ、だけどなんで隠すんだ？ 本当の事を話さないとお前らの関係が無くなるぞ!? それでもないのかよ!？」

鬼道「お前に何が分かる!」

悠「分かりたくないね! 妹に大事なことを隠してる事を! 本当の事を言わないで関係を終わらすことを! なんて本当のことを言わない! 言ったら何かが変わるだろ!？」

そして沈黙する。

悠「試合が終わったらでいいからさ、1回兄妹ちゃんと話し合えよ、それじゃあな」

そして俺は去り1回顔を洗ってからグラウンドに戻ると穴戸が倒れていた。

悠「どうしたんだ?」

染岡「しらねーが落ちてきたんだよ、あぶねえーな」

完璧に影山は殺す気だな……

悠「嫌な予感がするな…みんな！キックオフど同時に走って自軍まで戻れ」

染岡「おいおい、何言ってるんだよ！急に」

栗松「そうでやんすよ！」

悠「嫌な予感しかしないんだよ…最悪の場合死ぬぞ？」

半田「なに物騒な話をしてるんだよ」

少林「そ、そうですよー」

死ぬ気かコイツら!?

そして試合開始時間となり俺達は整列し握手をしている最中に鬼道から

鬼道「お前が言ってた通り、この試合が終わったら春奈と話そうと思う」

悠「そうか、なら勝つても負けても悔いが残らないようにな」

そして円堂と握手している時は何か小声で話し円堂が戻ってくるとみんなに指示を
だす。

円堂「みんな、キックオフと同時に自軍に走ってくれ」

風丸「おい、円堂までどうしたんだ？」

円堂「みんな！頼む！」

そしてみんな渋々了解した。

おれ人望ねー泣けるわ…

そして

角馬「フットボールフロンティア地区予選決勝！雷門中对帝国学園との試合が今開始です！」

そして笛の音と同時に悲劇が起こった：

無数の鉄骨が俺達の自軍に落っこちてきた。

角馬「あーと！どういう事だ!?突然雷門中側の天井から鉄骨が降り注いできた！大事故発生！」

見ているみんなが驚きを隠せない、そしてベンチでは

木野「みんな…」

響「まさか、ここまでとは…」

と言っていた、そして

角馬「ひどい…グラウンドは鉄骨が突き刺さりこれでは雷門中イレブンも！…え？なんと！雷門中イレブンは無事！誰一人が怪我をしていない模様です！これは奇跡だ！」

と言っているが

悠「ほら言ったじゃねーか！嫌な予感がするって！なんで信じてくれなかったの！」

染岡「い、いやあ悪い」

半田「なんか……ごめん……」

悠「それとちよつと話つけに行くわ！」

円堂「ちよつ！悠待てつて！」

そして俺達は鬼道と共に影山のいる部屋へ行く、そして……

鬼道「これがあなたのやり方ですか！天に唾すれば自分にかかる。あれがヒントになったのです！貴方にしては軽率でしたね。」

影山「なんのことだ？言っている意味がわからない、私が細工したつて言う証拠があるのかね？」

???「あるぜ！」

と言つたあとに何か放り投げられた。つてか危ない！当たつたら大惨事！そして投げた人を見るとそこには鬼瓦刑事がいた。

鬼瓦「こいつが証拠だ！」

悠「刑事のおじさん！」

そして影山はあつさり認め連行される。

そして鬼道達、帝国学園の選手達は自分たちはサッカーをする資格がないと言うが俺と円堂は

円堂「何言ってるんだよ！やるに決まってるだろ！」

悠「そうだろ？この前の練習試合のリベンジもあるんだ！勝ち逃げは許さないよ？」
そして俺達は試合の準備をしたのであった。

第21話 決戦！帝国学園！

影山が逮捕されてから1時間後、間もなく試合が始まろうとした。

今回のフォーメーションは

F W 染岡 豪炎寺

M F 半田 少林 悠 マックス

D F 風丸 壁山 土門 栗松

G K 円堂

てかなんで地区大会は土門と影野を交代してスタメン変えてるんだろ？ゲームだと普通にスタメンだったわ

そんな事はさておき、いま試合の笛が鳴った。

角馬「試合開始！さあ！初めに攻め込むのは雷門だ！」

豪炎寺が勢いよくドリブルをし帝国陣営を攻める、そして 成神と大野がスライディングするもそれを躲すと同時に染岡にパスして必殺技を放つ

染岡「ドラゴン！」

豪炎寺「トルネード！」

ドラゴントルネードは勢いよくいくのだがそれを源田が立ち塞がる。

源田「パワーシールド!!!」

源田がパワーシールドをしドラゴントルネードを防いだ。

角馬「帝国学園源田のパワーシールド！これぞ全国ナンバーワンキーパーの実力だあ
！」

源田「パワーシールドにはどんなシユートも通用しない」

さすがキングオブコントじゃなくてキングオブキーパー略してKOK：うん！だつ
さ！まだなにそのKOFのなりそこないな感じがするな……そんな事よりパワーシ
ールドはやっかいだなー

そして源田は鬼道にパスをしドリブルをする。

角馬「鬼道、少林寺を躲し雷門ゴールに向かって走る！」

そして鬼道はボールを上げ寺門は必殺技を放つ

寺門「百烈ショット!!!」

これなら円堂は熱血パンチで弾くから攻撃の準備をしないとね

そして円堂は防ぐ

円堂「熱血パンチ!!!」

だが弾き損ねボールはラインを切り相手のコーナーキックになった。

あつ円堂ミスった！あいつが試合でミスるなんて珍しいな

そして鬼道がコーナーキックをし佐久間がヘディングシュートを円堂はらくらく止めようとするが

角馬「おーと、円堂ファンブルファンブル！そして慌てて抑えた！」

あつこいつ鬼道と音無に事を考えてるな、最初のはただのミスだと思っただけで連続でミスるとか円堂がする訳ない。あいつとんだお人好しだなー人のこと言えないけど……

そして円堂は少林にボールを渡すが鬼道がボールを奪う。そして壁山がディフェンスをするがヒールリフトで躲す。

鬼道「円堂！」

クソ！間に合え！

豪炎寺「悠！」

悠「おう！」

俺と豪炎寺は鬼道の渾身のシュートをスライディングをして止める

角馬「おーと！悠と豪炎寺だ！前線から戻ってきた2人がシュートブロック！」

悠「絶対に負けない！」

そしてボールは弾け飛び洞面がボールを取るが鬼道が怪我をしたのを見てボールを

出す。

円堂「サンキュー2人とも!」

豪炎寺はそのまま去るが俺は

悠「円堂、ぼさつとするなよ」

そして俺達はプレーを再開しボールを持った染岡がドラゴンクラッシュを放つがパワーシールドで止められ、その後豪炎寺がファイヤトルネードを撃つがこれもパワーシールドで止められる。

源田「残念だったな、パワーシールドは連続で出せる」

衝撃波かーやっぱりあれを使わないとダメかな?

そして源田は咲山にパスし、咲山は鬼道パスすると佐久間と寺門合図を送り2人はゴールに向かって走り出す。そして

鬼道「皇帝ペンギン!」

佐久間、寺門「2号!!」

うわー生皇帝ペンギンでたー!なんであんな可愛いペンギンが…可哀想に…

角馬「なんだー!?!見たことのないものすごいシュートが雷門ゴールに迫っていく!」

そして円堂は必殺技で対抗する。

円堂「ゴッドハンド!!!」

だがゴッドハンドは砕かれそのままゴールへ突き刺す。

角馬「ゴール！帝国学園先制！鉄壁を誇るゴッドハンドを打ち破ったのは帝国の新必殺シュートだ！天才ゲームメーカー鬼道 有人ここにあり！グラウンドで指揮するよ
うに楽曲を奏でている！」

そして笛がなり前半が終わりベンチで作戦会議をする。

風丸「円堂どうした？」

円堂「俺にもわからない」

そして夏末が円堂の所に行き話す。

夏末「一つだけ言えることがあるわ、今の貴方には私をサッカーに引き付けたあの輝きがなくなつてよ。」

やっぱり容赦ないなー生徒会長は

響「影山に何か言われたのか？」

円堂「いいえ……」

さーて後半になったら豪炎寺先生の荒治療があるしそのままでもいいかな？

そして後半が開始し帝国の選手達は巧みなパスやドリブルを駆使しゴール前に来てシュートするが

風丸「ゴールはやらせない！」

風丸がゴール前に立ち体を張って止める

円堂「風丸!」

風丸「お前が調子が悪い時は俺達がフォローする、仲間だろ!」

さらに壁山、土門、栗松がゴール前に立つ

角馬「なんと!雷門ディフェンス陣が集結!」

そして帝国のシュート体を張って止め続けるがボールが空中にいく

鬼道「いまだ!」

そして佐久間、寺門、洞面が飛び必殺技を放つ

佐久間 寺門 洞面「!!デスゾーン!!!」

角馬「雷門ディフェンス陣反応できない!防げるか円堂!」

円堂の野郎必殺技の準備してない!クソ!追加点が入る!

すると突然横から

土門「うおおお!!」

土門が顔面でデスゾーンを止めボールは外にでた

円堂「土門!」

角馬「土門防いだ!捨て身のプレーだ!」

よしもうすぐで荒治療はじまるぞー

円堂「土門大丈夫か？」

土門「あ、ああ……」

円堂「なんて無茶を……」

土門「デスゾーンはこうでもしないと止められない……円堂、俺も雷門イレブンになれたかな？」

円堂「当たり前だ！お前はとっくに仲間だ！」

そして土門が退場と同時に俺は

悠「豪炎寺」

豪炎寺「ああ」

そして俺がボールを渡すと豪炎寺は円堂に向かってファイヤトルネードをする

豪炎寺「円堂！」

円堂を呼ぶと同時にファイヤトルネードが炸裂した。

うわーえげつないなこれ、これをあと何回見るんだよ……

そして豪炎寺は円堂のそばに行き喋る

豪炎寺「俺がサッカーに掛ける情熱を全てを込めたボールだ」

円堂「豪炎寺」

豪炎寺「グラウンドの外で何があつたかは関係ない、ホイッスルが鳴ったら試合に集

中しろ!」

そして豪炎寺は去る、そして俺も円堂に話し掛ける

悠「全く試合中に上の空とかキャプテンとしてどうなんだよ、考え事は試合が終わってからにしろ」

円堂「悠まで…」

土門が退場したので影野が交代で入り、試合が再開する

角馬「帝国、辺見のコーナーキック!ボールは鬼道へ!」

そして鬼道は上空にボールを蹴りあげ、佐久間はそのボールをヘディングして鬼道に返し

鬼道 佐久間「ツインプースト!!」

そして円堂は吹っ切れたのか試合に集中し新たな必殺技を出す

円堂「爆烈パンチ!!」

角馬「おーと、円堂新必殺技か!!」

鬼道「それでこそ円堂だ」

円堂が弾いたそのボールは前線にいき染岡がトラップする、そして俺は

悠「染岡!俺にボールをくれ!あれを出す!」

染岡「わかった!」

染岡からもらい俺は化身を出す

悠『宇宙の覇者 コスモ!!!!』

そして俺はそのままシュート体勢に入る

悠「コスモ・ブレイク!!!!」

俺は化身技を放ちシュートをする

源田「やらせるか！パワーシールド!!」

だがパワーシールドでは太刀打ち出来ずゴールに突き刺す。

角馬「ゴール！雷門同点に追いついた！」

円堂「よし！」

ついに同点になるが

悠「やっと同点に追いついたな！」

マックス「同点にしたのはいいけど化身出して大丈夫なの？」

悠「大丈夫、だけでもう化身は出せないよ？」

もう本当に化身は出せないよーふええん…ええ？急に可愛くなるな？ばつか！お前！

男がやっても意味無いぞ？男の娘は意味あるけどね！

そして試合は再開し雷門と帝国は接戦をしている

角馬「まさに一進一退！なんという激しい試合だ、試合終了時間が刻一刻と迫ってる

このままPK戦か!? 双方疲労困憊、体力はとつくに超えている!」

そして鬼道は宍戸からボールを奪いドリブルをする

角馬「おーと、これは皇帝ペンギン2号のフォーメーション!」

そして鬼道は指笛をし

鬼道「皇帝ペンギン!」

佐久間 寺門「2号!!」

悠「円堂!!」

円堂「ゴールは絶対に割らせない!」

円堂は渾身のゴッドハンドを放つ

円堂「ゴッドハンド!!」

だがゴッドハンドは押されている

豪炎寺「円堂!」

角馬「押し込まれる円堂、止めきれなければこのままゴールとなってしまう!」

円堂「このボールは、絶対に…絶対に…止めるんだ!!」

そして円堂は左手も使い皇帝ペンギン2号を防ぐ

角馬「なんと円堂両手でのゴッドハンドだ!! 円堂受け止めた! 帝国渾身のシュートを受け止めた!」

よし、これから反撃開始だ！

円堂「いくぞ!!!」

そして円堂は風丸にパスをする

風丸「円堂が守り抜いたこのボールは！」

少林「絶対に！」

半田「ゴール前まで、繋いでみせる！」

風丸、少林、半田の順にパスが周りボールは俺のところに来る。だが

鬼道「悠!!!」

鬼道が俺の前に立ち塞がる。

悠「お前を抜いてこのボールを繋げる！」

だが鬼道は

鬼道「俺は試合に勝ち春奈を取り戻す!!だからこの試合絶対負けられないんだあ!!!」

そして俺は渾身の必殺技を出す

悠「花鳥風月!!!」

花鳥風月を出し鬼道を抜いた俺はボールを空中に蹴り、豪炎寺と壁山が飛ぶ

源田「パワーシールドを超える最強の必殺技、フルパワーシールド!!!」

だが壁山の背後から一人飛んでくる

源田「なに!？」

角馬「なんと円堂だあ!壁山の背後から円堂が上がった!これはイナズマー号か!？」

そして円堂と豪炎寺はイナズマ落としてもイナズマー号でもない必殺技を放つ

円堂 豪炎寺「イナズマー号落とし!!！」

イナズマー号落としてはフルパワーシールドと衝突する

円堂「いつけー!!!」

悠「入れ!!!」

そしてイナズマー号落としてはフルパワーシールドを砕きゴールに突き刺す。

円堂「やった…やった、やった!!!」

ゴールになった瞬間俺達は円堂の元に走り喜び合う

角馬「決まったー!なんとキーパーの円堂までシュートに関わるサッカーで一点をも

ぎ取った!」

すると試合の笛がなり試合が終了すると円堂が急にみんなに謝った。

円堂「みんな、迷惑かけてごめん。」

風丸「もういいさ円堂、それよりみんなお待ちかねだぞ?」

円堂「えっ?」

すると観客席から雷門中のコールがはじまり俺達は腕を振る。そして鬼道達帝国学

園の選手達が控え室に戻ろうとするが音無が鬼道呼び止める。

俺？俺は影から円堂と木野と一緒に見てるよ？

鬼道「春奈」

音無「私を、私を引き取るためにお父さんと約束したって」

鬼道「ああ」

音無「連絡くれなかったの、私のためだったのね…」

鬼道「お前と暮らすためなら、どんなことも我慢できた。だが、すまない」

音無「ううん、私音無のお父さんお母さんと暮らして幸せよ？」

鬼道「えっ？」

これぞーと見てるけど視線とか感じてバレないよな？めちやくちや見てるもん円堂とか木野とか円堂とか…2人とも見すぎやろ！

音無「音無で、ううん音無 春奈でいいの」

鬼道「そうか…いい父さんと母さんなんだな」

そして音無は鬼道を抱く

おい…いま18禁な考えをしたやつ表出る…これは健全な兄妹だぞ？

音無「ありがとうお兄ちゃん！」

そして遠くで見ている俺達は

悠 「2人とも仲を取り戻してよかったな」

円堂 「そうだな!」

木野 「悠くんが必死に説得したからだよ」

悠 「え?あの時見てたの?覗くとか趣味悪!」

そして俺達は戻り地区大会のトロフィーをもらい次は全国に行くのであった

第22話 伝説！イナズマイレブン！と謎の人物

円堂「やったぞー!!」

「「「「やったぞー!」」」」

今俺達は優勝した記念に雷雷軒で飯を奢って貰っている。だって店長響監督なんだもん、あたり前田のクラッカーだよ! え? トロフィーを貰ったあとの話は? だって? あーそれは…

~~~~~昨日~~~~~

円堂「足大丈夫か?」

鬼道「大したことは無い」

円堂「よかった」

鬼道「次は全国大会だな」

円堂「お前達の方まで頑張るぜ!」

悠「え? お前まさか知らないのか?」

円堂「えっ? なにが?」

鬼道「帝国学園も全国に出場するんだ」

悠「前回優勝した帝国は優先的に全国大会に出られるんだよ、てかまーた調べてなかったの!?! あれほど大会内容と相手選手は調べると言っただろ!」

こいつまじで学ばないな…本当に困ったキャプテンだな

円堂「ごめんって」

鬼道「だが俺達は新たな目標ができた」

円堂「目標?」

鬼道「雷門中への雪辱は全国大会で果たす!」

悠「まあ、帝国と戦うのは決勝になるだろうけどまさかと思うけど一回戦で負けるとかないよね?」

鬼道「言わせておけば…それはこちらのセリフだお前達は俺達を倒したんだ、無様に負けるのは許さないぞ」

まあ、そんな訳で鬼道との話は終わったんだよ。あつやべえ完璧フラグ言ってしまった…まあいいか!

そんな訳で今に至る

悠「やつぱりタダ飯は美味いわー監督ーマックスコーヒー頂戴」

響「そんな甘ったるいもんなんておいてねーよ」

悠「終わった…俺の人生終わってしまったよ…」

風丸「そんなに落ち込むのか？」

馬鹿野郎！マックスコーヒーが無いんだぞ！死ぬに決まってるじゃねーか！あの飲み物は何にでも合うんだよ！あつ、嫌いな食べ物論外ですはい

そしてご飯を食べ終わり次の日、円堂から連絡であるイナズマイレブンと試合する事になったから河川敷に集合と言われ試合してるんだけども…

悠「これがあのイナズマイレブンとは思えないんだけど…」

だってキックオフシュートをしようとするけど空振りしてクリアしようとしたらミスってそのままオウンゴールだぞ？幻滅するだろ？普通 いまはもう2-0だぞ？

それと今日のフォーメーションは

フォーメーション 4-3-3

F W 染岡 悠 豪炎寺

M F 半田 マックス 少林

D F 風丸 壁山 土門 栗松

G K 円堂

珍しく俺がFWになって4-3-3の初の試みまあ公式じゃないからいいんじゃないか？

すると響監督が

響「お前達、なんだそのザマは！俺達は伝説のイナズマイレブンなんだ、そしてここに伝説を夢に描いた子供達がいる！俺達はそれを背負う責任があるんだ！その思いに答えてやろうじゃないか、本当のイナズマイレブンとして！」

そして試合が再開するとイナズマイレブンの人達は別人かのようなプレーをしシユートチャンスになる。

マスター「クロスドライブ！」

円堂「熱血パンチ！」

円堂が熱血パンチで対抗するが威力に負けそのままゴールに入り1点を返された。そして次に染岡がシユートチャンスに持ち込んだ。

染岡「ドラゴンクラッシュ！」

響「見せてやろう！これが元祖ゴッドハンドだ!!」

そして響監督はゴッドハンドをだしドラゴンクラッシュを止めた。

円堂「すげー！やっぱ元祖はすげーや！」

悠「円堂！呑気なこと言ってるカウンターでやられるぞ！」

これ相手はイケイケな雰囲気だしてるなー今までにない感じた、いつもの試合だと俺らがイケイケな雰囲気だしてから逆にやられると調子が狂うなー

響「さあ、浮島見せてやれ！」

響監督が浮島さんにパスをして備流田と一緒に必殺技をだす

浮島 備流田「炎の風見鶏!!!」

炎の風見鶏はそのままゴールに突き刺し同点になった。

悠「あれ?この技どこかで?」

すると円堂も何かを思い出したようで審判にタイムをお願いしみんなをベンチに集めさせる。

円堂「やつぱりだ!あれは炎の風見鶏だ!」

風丸「炎の風見鶏?」

悠「ああ、前にイナズマ落としが書いてあった本の中にはまだほかの必殺技があつて炎の風見鶏もそのうちの一つ、確か内容は」

円堂「えーとこの技はスピードがビューンジャンプ力がビヨーン」

木野「相変わらずの宇宙語ね…」

悠「いつもの擬音だよ…もう少しわかりやすくしてくれないかな…」

すると風丸が

風丸「スピードとジャンプか、だったら陸上部の定番だな」

円堂「うん!これは風丸が適任だな、もう1人は豪炎寺だな」

そして試合は再開し風丸と豪炎寺は何度も炎の風見鶏をやるうとするが成功ができない。

円堂「焦るな!俺たちにもできる!」

響「浮島!もう一度見せてやるか!」

浮島「しつかりとな」

そして響監督からパスを貰い炎の風見鶏をもう一度放つ

浮島 備流田「炎の風見鶏!!」

円堂「ゴッドハンド!!」

円堂はゴッドハンドをするがゴッドハンドも破られとうとう逆転された。するとベンチから影野がフィールドに入ってきた。

影野「この技の鍵は、2人の距離だよ!」

円堂「え?」

すると影野が必殺技の鍵を風丸と豪炎寺に教えそのままベンチに戻り試合が再開する。

悠「いくぞ!2人とも!」

俺は豪炎寺にパスをし2人は必殺技の構えをする。

風丸 豪炎寺「炎の風見鶏!!」

そしてゴールに突き刺し同点に戻し試合が終了し結果は同点に終わり帰ろうとする  
と突然スマホからメールがきた。

悠「誰からのメールだ?これ?鉄塔に來い?」

円堂「どうしたんだ?悠?」

悠「あー悪い、急用ができたから先行くわ」

円堂「そうか、じゃあな悠」

俺は円堂と別れ1人で鉄塔に行く

まじで呼んだやつ誰だ?最悪スカウトの可能性も考えた方がいいな普通に断るけど  
影山の陰謀だったら終わったな:

そう考えてたら鉄塔に着いた。

悠「着いたのはいいけど誰もいないしイタズラだったのか?」

あーあぶねー変なことに巻き込まれると思った:

???'「やつと来たか悠、待ちわびたぞ」

悠「誰だ!つてお前本当に誰だ?」

いや本当にだれ?青髪の女性でなんか中の人がやんすと同じの人なんてオラ知ら



ねえーぞ

??? 「忘れたのか!私だ!八神玲名だ!」

悠 「えー玲名?ウツソだろお前玲名はそんな口調じゃなかったしそもそも証拠ないよね?」

玲名 「あれは昔の話だそれに証拠もある!」

と言いつつ証拠を見せてきた

悠 「あーこれお日さま園の写真じゃんって事は本当に玲名なのか!」

玲名 「だから本当だと言ってるだろう!」

本当にとんだ茶番だぜ!!こりゃ!!

まあそんな訳で玲名と再開し鉄塔広場にあるイスに座る

悠 「それにしても随分と雰囲気変わったなお前」

玲名 「あれから何年経ったと思ってるんだ、数年あれば変わるに決まってる」

悠 「そうか?前に杏に会ったけどあまり変わってなかったぞ?」

玲名 「なに?アイツがか?」

と言いつつ玲名は考え事をする。

あれ?おーい玲名さーん考え事しながらなに謎のオーラが出してるんですか?

悠 「急に黙り込んでどうしたんだ?」

玲名「い、いやなんでもない」

悠「ウソだあ!!! その言い方は誤魔化してるだろ！」

おい誰だよひぐらしのなく頃にでてくる子と呼んだ人

玲名「急に大声出すなうるさい！（ペチツ）」

悠「ちよ、急に叩くなよあまり痛くないけどよ」

前世は女の子に関わりがなかったから免疫がないぜよ！

玲名「す、すまん：／／／」

ちよつとなに照れてんのよー玲名ーって俺は冷やかす女友達かよ…よし！イタズラするかこれ！

悠「ん？どうしたんだ？急に真っ赤になつて」

玲名「う、うるさい！だまれ！（パシン）」

悠「痛てー!!!」

そして俺は思った。

玲名は弄ると暴力する。把握。

## 第23話風丸部活辞めるかもつてよ

さーで突然だがいま俺は何をしていると思う??? 正解は！

風丸 豪炎寺「炎の風見鶏!!」

正解は炎の風見鶏をみているでした! いやーあれ最後に出てくる鳥が毎回不死鳥の見えるの俺だけかな? 俺だけですな! 笑

円堂「すげー息ぴったりだ!」

染岡「こりやドラゴントルネードも負けてられねーぜ」

いや染岡能力的には炎の風見鶏の方が上だぜ? ゲームの意味で

と呑気なことを考えてたら1台の車が止まってバトラーさんが扉を開けると1人のおじさんが出てきた

土門「ねえ、あのおじさんだれ?」

染岡「知らねーのか? おいおいうちの理事長だぜ? つまり雷門の親父さん」

土門「んな事言ってもおれ転校生だし知らないつつうの」

おいお前スパイした癖に理事長のこともしらねーの？スパイとか学校の情報とか知ってるでしよ普通に考えてだめでしょ…

悠「なんで理事長がこんな所に来たんだ？珍しい」

夏未「さあ？」

円堂「わかった！理事長も元イナズマイレブンだったんだな！」

夏未「なんでそうなるのよ…」

悠「そうだったら前のイナズマイレブンとの試合来てただろ…少しは考えてよ本当に…」

理事長は全国大会出場のお祝いの言葉更には出場記念に部室を新しくしようと提案してきた

おい理事長提案したのはいいけどさその前の失態をなかったことにしようとするな夏未が顔真つ赤だぞ可哀想みんなの目の前で失敗した親がいて

すると円堂は

円堂「俺はこのままでいい…この部室は試合も出来なかった俺達の事もイナズマイレブンの事もみんな知ってるこうして仲間も増えてきた。この部室は雷門イレブンの歴史そのものなんだ俺達大切な仲間なんだよ！」

悠「そうだな円堂だって俺達がサッカー部を始めた最初の場所だからな」

すると他のみんなも円堂の意見に賛成し部室を新しくすることはなくなった。そして俺達がグラウンドに戻ると学校に残っている生徒から応援が飛んでくる、そして風丸があとから来ると言つて陸上部の方へと行き戻つてくると炎の風見鶏は打てなくなつていた。

悠「豪炎寺、風丸はなんか考えてないか？」

豪炎寺「多分陸上部に戻つてくれと言われたんじゃないか？」

悠「あーありそうだな、じゃあ俺らの必殺技の練習でもする？ 御影専農の時に出了たあの技を完成したいからさ」

豪炎寺「ああ だけどそう簡単にはできないぞ？」

悠「そこは…根性論でどうにかなる！」

豪炎寺「お前なあ…」

大丈夫大丈夫多分試合でなんか超次元要素が出てきて完成すると思うから！

そして次の日円堂と登校していると河川敷で風丸と後輩の宮坂が話し合つてるのを聞いてしまった

悠「なんか話してるなあいつらどうする話しかけるか？」

円堂「まあ そつちに行けばいいだろ」

風丸たちの方へ行くと話が終わり宮坂とすれ違った

円堂「よお」

宮坂「…」

悠「シカトされたな、ってな訳で風丸達の話聞いちゃった」

風丸「あいつ宮坂って言ってまだ荒削りだけどいいスプリンターなんだ」

そして俺たち3人で河川敷に流れてる川を見ながら話した。風丸は陸上を取るのかサッカーを取るのか迷っていて片方だけ取っても裏切るような感じがすると云っている

円堂「俺は風丸が選んだことがベストだと信じてるよ納得いくまで考えとけよ」

悠「そうだな、悩み事なんて本当に自分のやりことをすれば解決出来るさ」

風丸「お前ら…」

そして円堂が風丸の肩に手を置くと円堂はバランスを崩しボールがそのまま落下し川シユート!した 超エキサイティング!!!デュ○○ドーム!!!あつこれネタを遊戯○のやつや!

悠「あ!ボール待てや!あつちよつ (ドボーン)」

円堂「大丈夫か悠!ほら (スツ)」

悠「ありがとう円堂!よっこいしよ!」

円堂「えっ?」(ドボーン)」

風丸「全くお前ら何してるんだよ」

悠「お前も巻き添えだ！」

風丸「や、やめろ!!! (ドボン)」

最終的に俺ら3人はずぶレになりそのまま学校へ登校したのであった  
あと先生の説教付きで廊下に立たされた：